当流

茶之湯評林大成

五

435

茶湯評林巻之五目録

風炉之大要
逆勝手出風炉薄茶手前
順勝手角風炉夜此薄茶手前
逆勝手出風炉此薄茶手前
逆勝手角風炉此薄茶手前
順勝手長板薄茶手前
逆勝手長板躙薄茶手前
長板之羅手前
四畳半利休堂古薄茶手前

[seal]

三畳大織部　臺古薄茶まゐる
一畳半利休堂古薄茶まゐる
小休臺柄杓立薄茶まゐる
運勝手小休臺柄杓立薄茶まゐる
向切点て臺古薄茶まゐる
惣論

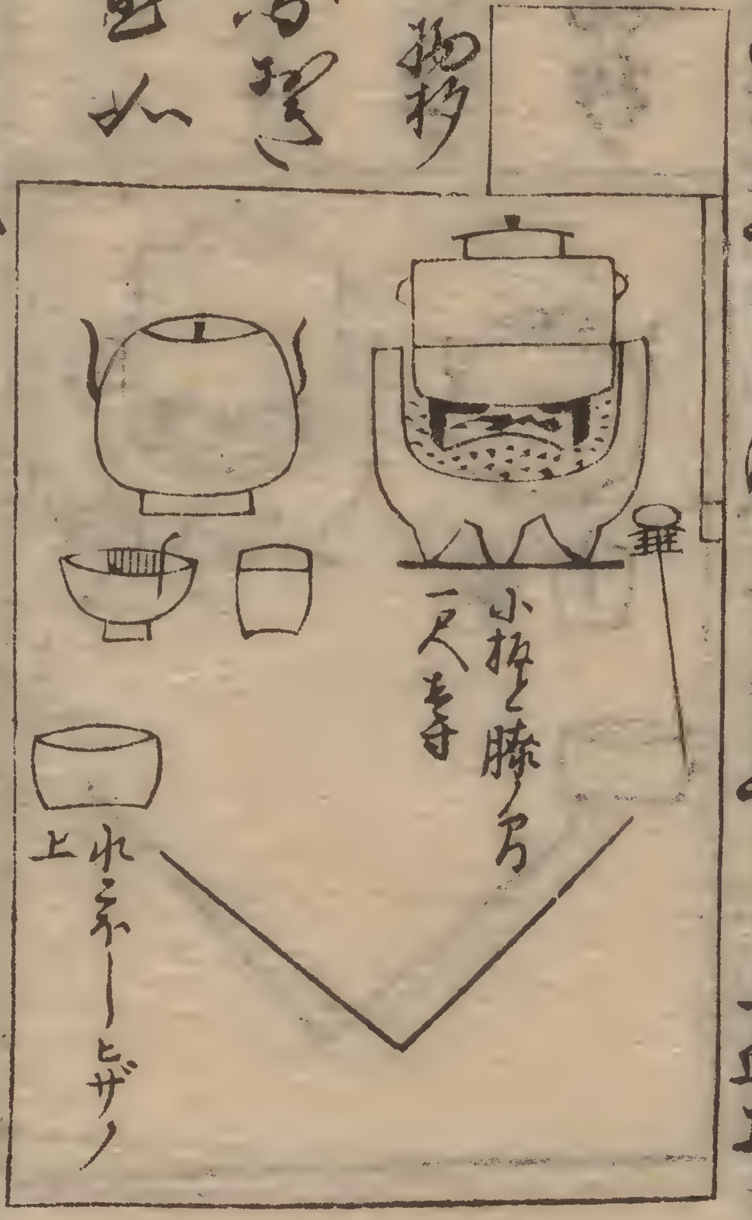
茶湯評林巻之五

風炉の大要

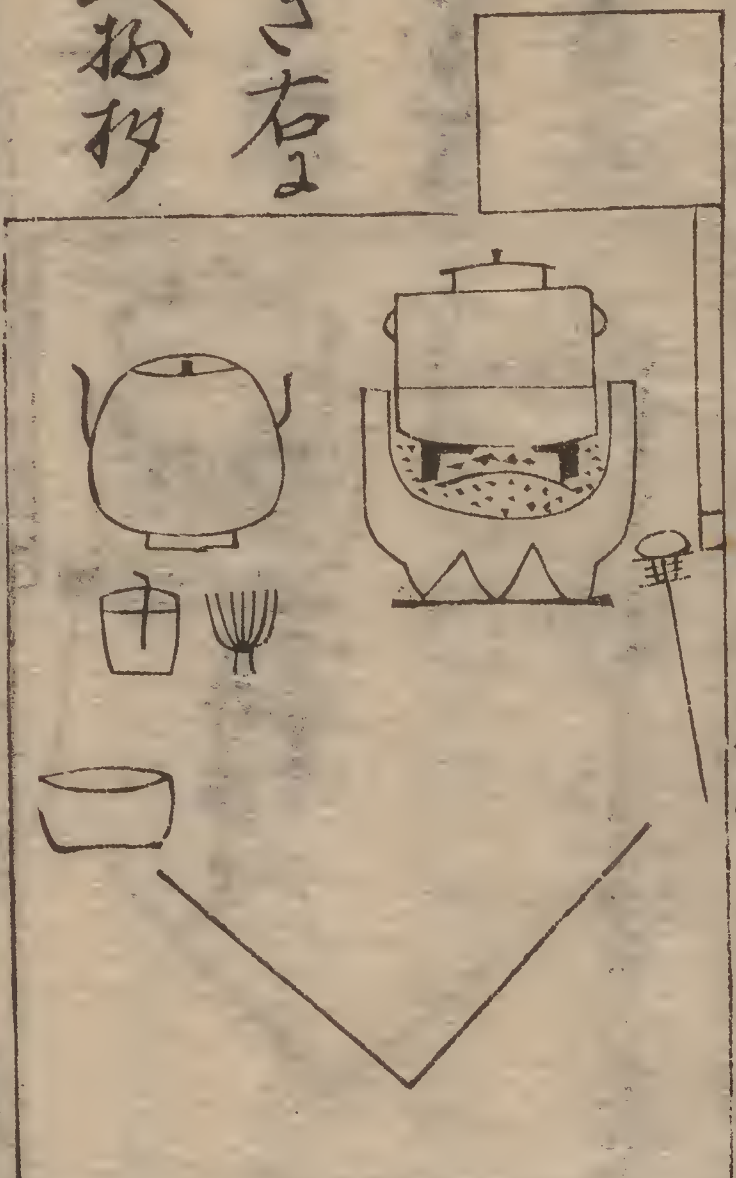
一四月朔日ハ衣更とて炉をふさぎ風呂にかゆる八月晦日迄ハ
風炉の釜を用ゆ其故ハ薄茶を夏中ハ風呂にてたてるを要とせり
又佗人の二階棚を揃人ハ炉もさしくなき由へ風炉も
臺子よりいでたる事にて中にもとる故此事にて道具の
ゐ風炉の評下にて薄茶にてたてる事を常にて根本
臺子の風炉を用ゆる事の説之
一風炉の小板向の方ハ地敷居より少し小板の間ハ八寸あり
おくべし脇の透目九寸に小板をおくべし

一風炉大板(スイタ)の時ハ向に言ハ八寸脇ハ畳の目七メニ置之
小板の時ハ蓋置(フタオキ)を大板の外(ホカ)へ(おし置之)
一座敷(ザシキ)なとハ風炉を爰(カネ)にても風炉先に二枚屏風(ビヤウブ)をた
て風炉を荘(カザ)る也本式(ホンシキ)ハ屏風ハ縁まで七尺八寸にも五寸に
もちぢめてたゝみするこ(と)あり両面にして絵(エ)をおもてへ見せべし色(シ)
紙(キシ)短冊(タンザク)を張(ハル)事(コト)ハ前のごとし但紙の縁をおくべし上下ハ金(?)
物ぢき也平(ヒラ)にんごをおくべし
一数寄屋(スキヤ)囲(カコヒ)なとハ屏風を立(タツ)る事なし
一かべの鳥居(スエ)(リ)なとに掛(カケ)たる香合(カウゴウ)鐶(カン)にも火箸(ヒバシ)羽箒(ハウキ)を
おき末(スエ)にするべし口伝

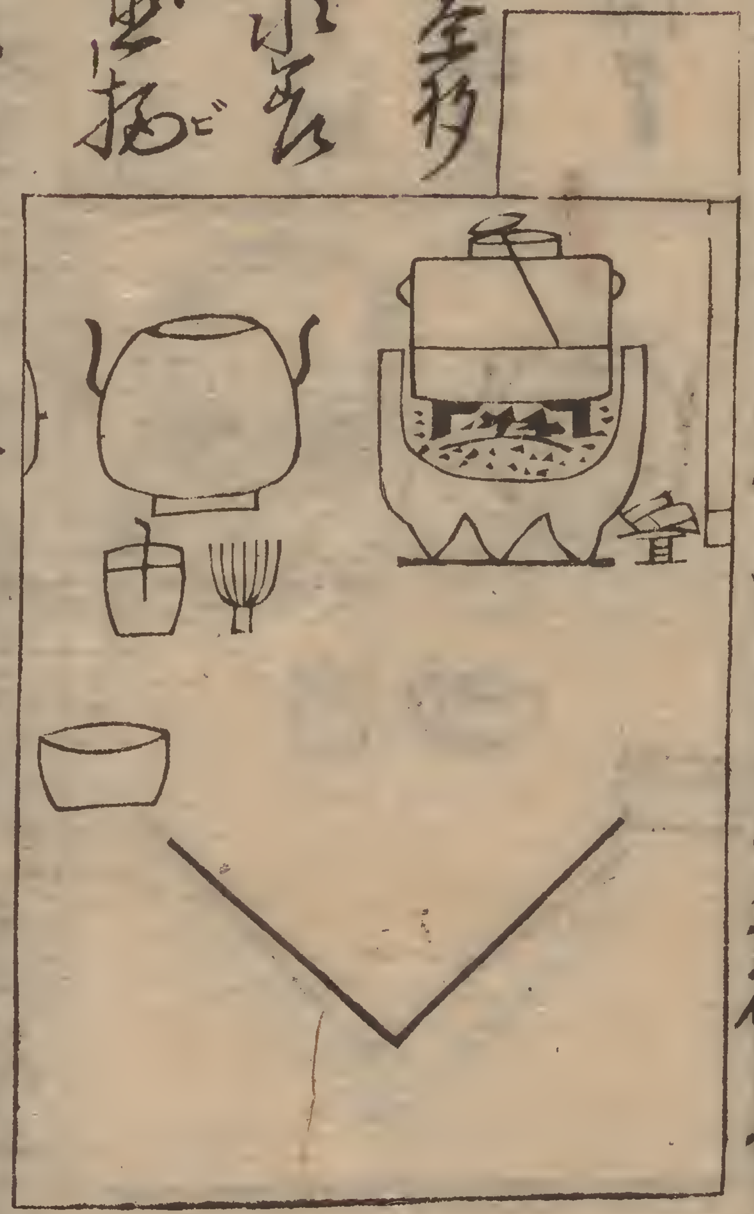
に勝手(カツテ)と風炉(ウス)蔵(ロ)茶をたて
一同(カ)釜(マ)ハ茶ぬ(ナ)よく風炉に置(ヲ)せん耳(ミミ)ハ水指(ミヅサシ)にかざらぬやうにすべし
茶(カメ)碗(チヤワン)ハ茶杓(ハヤ)のつくべきほどに置(ヲ)くべし蓋おきハ小板
の通(トヲ)りに置べし
水翻(ミヅコボシ)ニ蓋置(フタオキ)入(ル)上に柄杓
をうけ左に持出常のごとく
同じひざ間(マ)に置(ヲキ)如
常小板を曲尺(カネ)にして茶入茶すくはさ左の手にてひしやく持つぐ
かく右の手にて蓋置を取常のごとくひしやくを向へ置(ヲキ)へ
と一服(イツフク)左の手にて茶碗を取右の手八分(ブ)中(ナカ)に押(ヲシ)向ハ小板のき



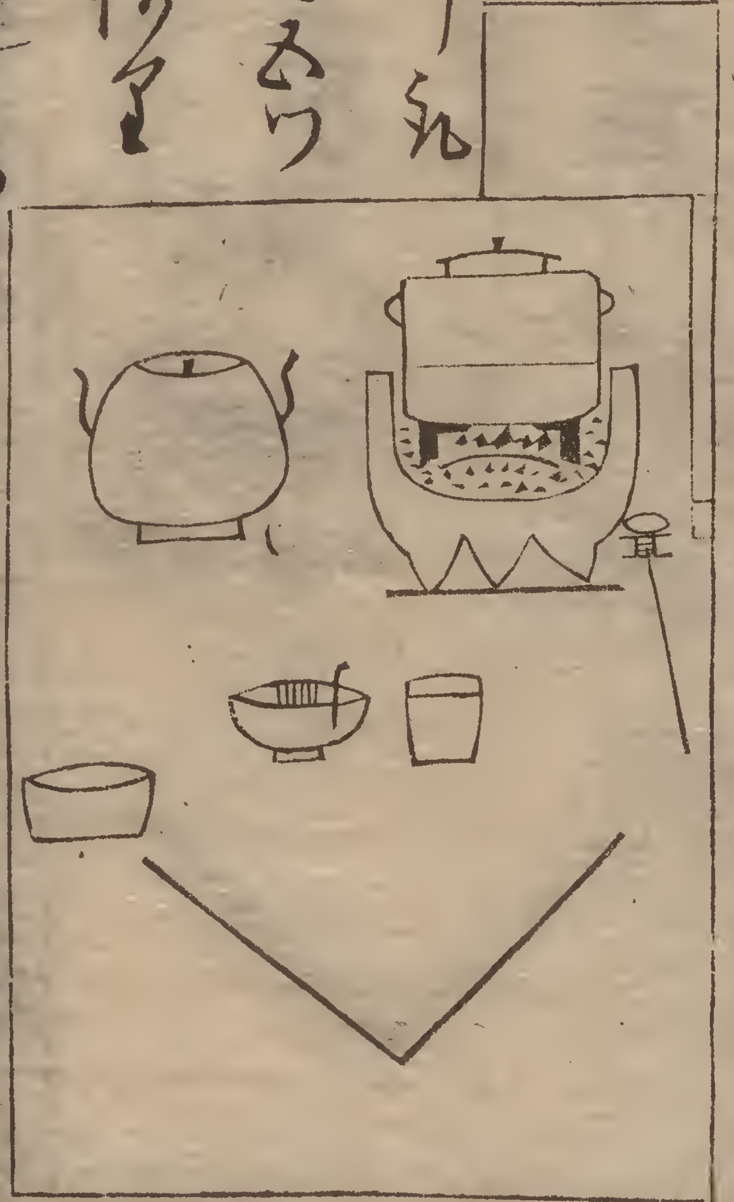
ハと茶碗の縁(フチ)よりまゐ六寸ほど巾(キン)しおきて右のかたくひざにのせお
へ置錺る帛紗出し茶巾ちぢき左手ニて蓋をとりど
釜のあいまいまをとじ中ひ出寄小板あたりの方へおき
く帛紗掛の釜の上へ
持茶杓巾の向へ
てまわしてよ持て右に
て茶入を取ふくべ掛杓
取たへ出て帛紗をまきよちききく茶巾を
茶碗蓋の上ニ置杓持取出し湯を入ゆもをとし建水(スヂカヘ)に
持きびやくよ置べし口傳右の如く茶入も湯(よう)次(じ)三つまで



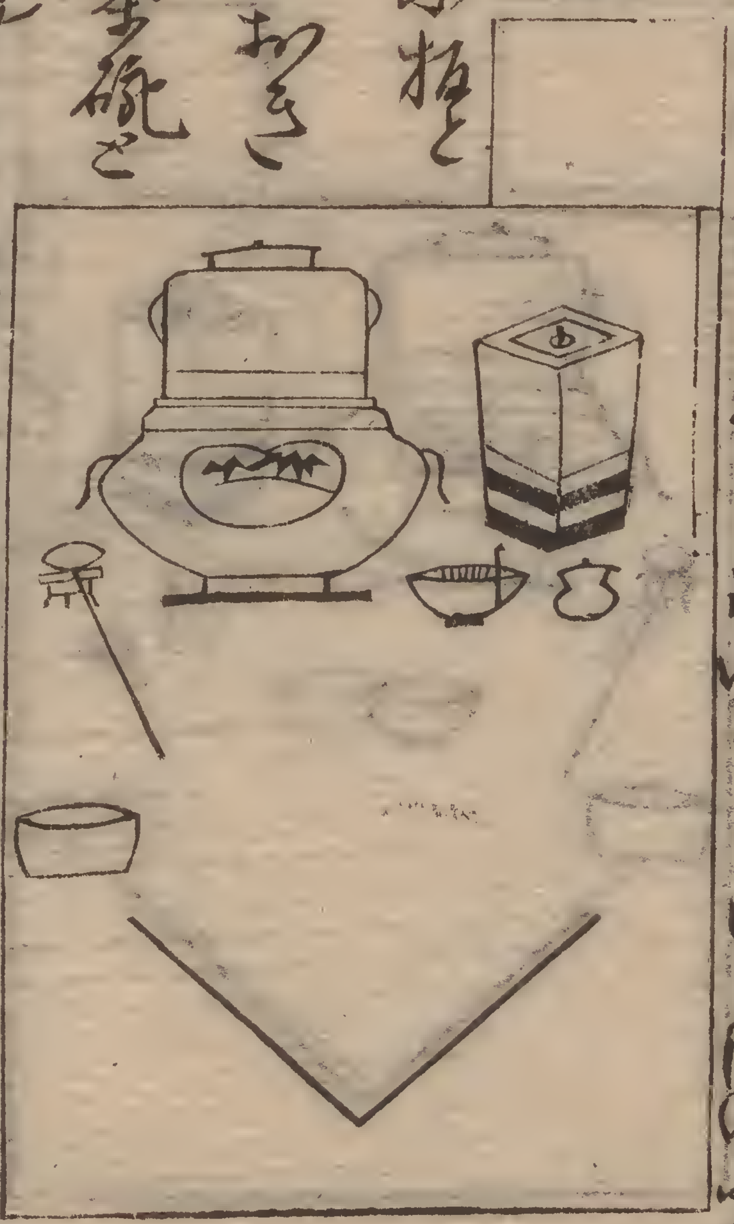
如此へ遣(ヤル)し茶巾を其上ぼ置お茶巾ちぢき長み如く茶碗ニ
上(アゲ)湯を汲(クミ)出し茶をもんを巾ひトよ置茶巾しるお茶此
蓋(フタ)へひげ茶杓を掛(カケ)ニ置此茶を入て茶碗ともに茶を
練ほどよ入とを
して右の方へ出し茶杓
をうけとりめくれ小茶
のよう取ひやく置杓(ビ)
杓(ヒシャク)取よ水湯とそひくこと練ほどよ入ると八分ほど入りへし水
一まいをかもめ合汲水八分ほど入ておべしひやくのよう吹る
さとき八ひきびやくよあり口傳茶を取茶筅ハくと如く建水へ
しときハひきびやくよおり



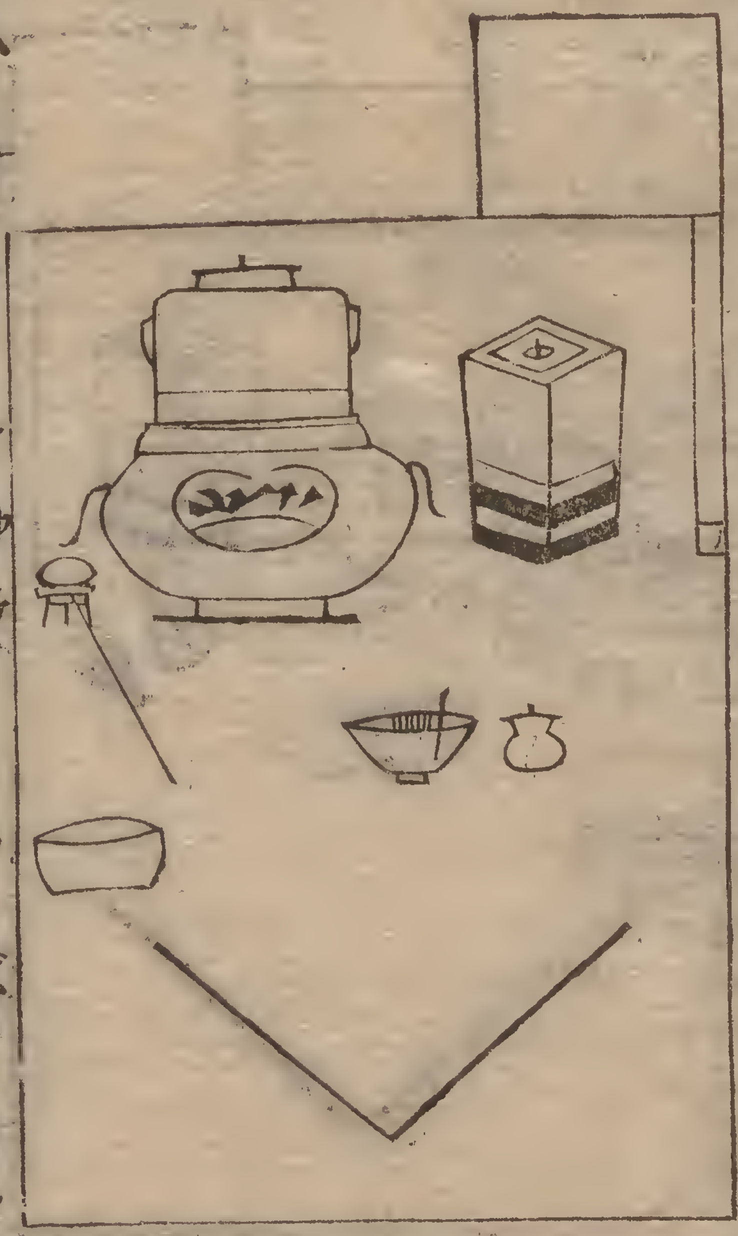
をどし茶碗を客へ出すべし手前ハ何ぬく點べし
濯めよ茶碗をとると湯をこぼし入ちらぎして又水を入捨
杓釜へかけるし時又杓さびしやくかへり口傳茶杓をばらく
と始るを和泉をそ
水をとゝく茶巾 乳
中へ入下よ打て河るり
此通如此引とひ阿るま
風炉のしつらひの口傳茶を入茶杓巾ひ入乳かぐ
ひつく成水を捨茶此えをあるひつくべしをそるよけ
手捨は蓋をさべし 出 建水杓杓蓋置持立べし



一 勝手 風炉荘此風炉茶をまつ
一 九重が かう風炉大燈口銅の角水指荘がのし 水
こぼしよ羽杓蓋置入たよ持玉 出常かき いなく此間ハ小板より
一 尺四寸あ板ほ如
ひつく成さ置小板を
一 尺九メの三中よおき
ひつくけたのよく茶碗を
又小板の通三越を手 棗袋解ちぎきして ま を巾ひ
水指の中小板の外通よ置べし 茶杓巾ひ 當つまゝ
とかへし茶入とうまく 建水蓋置 ひつく成 茶は蓋 乳



一濯(ヨウ)には茶碗出すると湯をつぎてすゝぎて水を入茶杓を
はさむべし此時はひしやくはまつすぐにおきひしやくのゑをしめ
ひしやくにて總水をたして茶巾を入下におくべし茶筌を



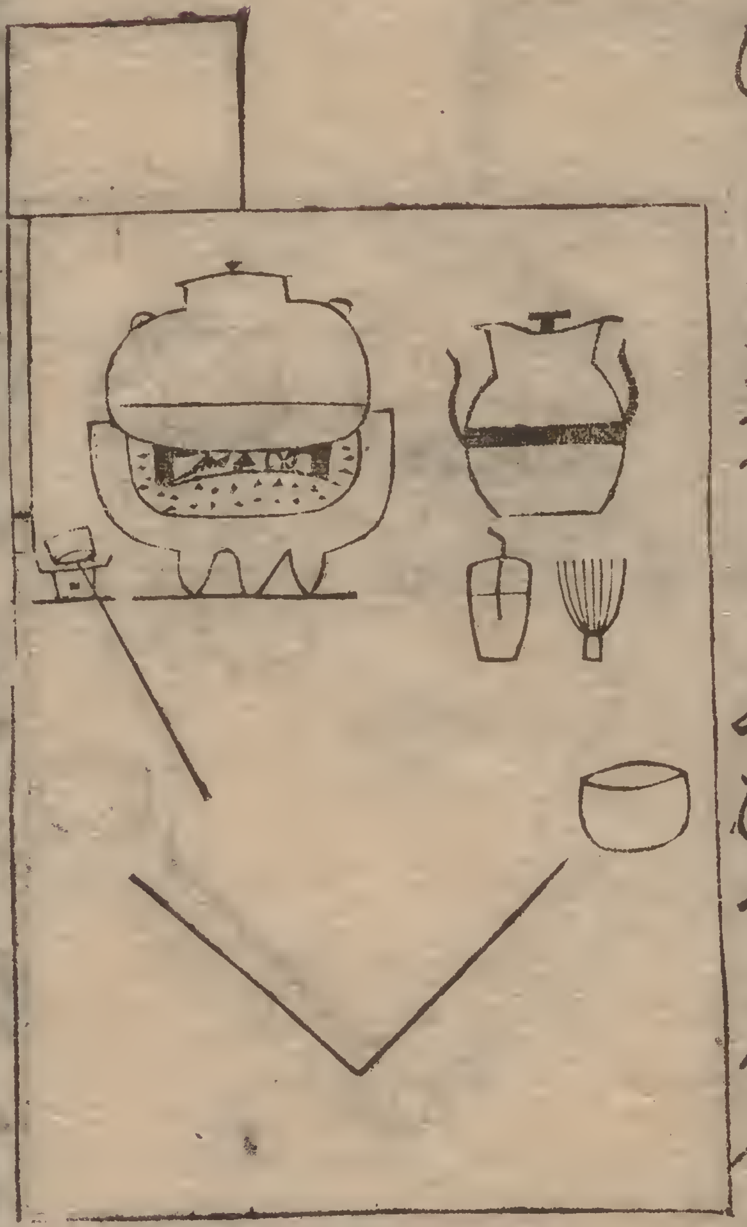
入茶杓をかけ常水指内通を曲尺(カネ)にしておくべしひしやくは釜 二
出し湯(ユ)がへしをして茶の蓋とりてひしやく下におき水指
の蓋をとるべし如常水こぼしを勝手へ入之

逆勝手(ギヤクカツテ)お風炉(フロ)左(ヒダリ)へよる

一古流の釜並(ナラ)べ風炉銅(カラカネ)は出指截(カザリ)つけはし磨して
風炉は泥にして大かるせいの高きを茶碗(チヤワン)をわんその細
風炉釜をふるきやあるもへのめひあしし水こぼしへ

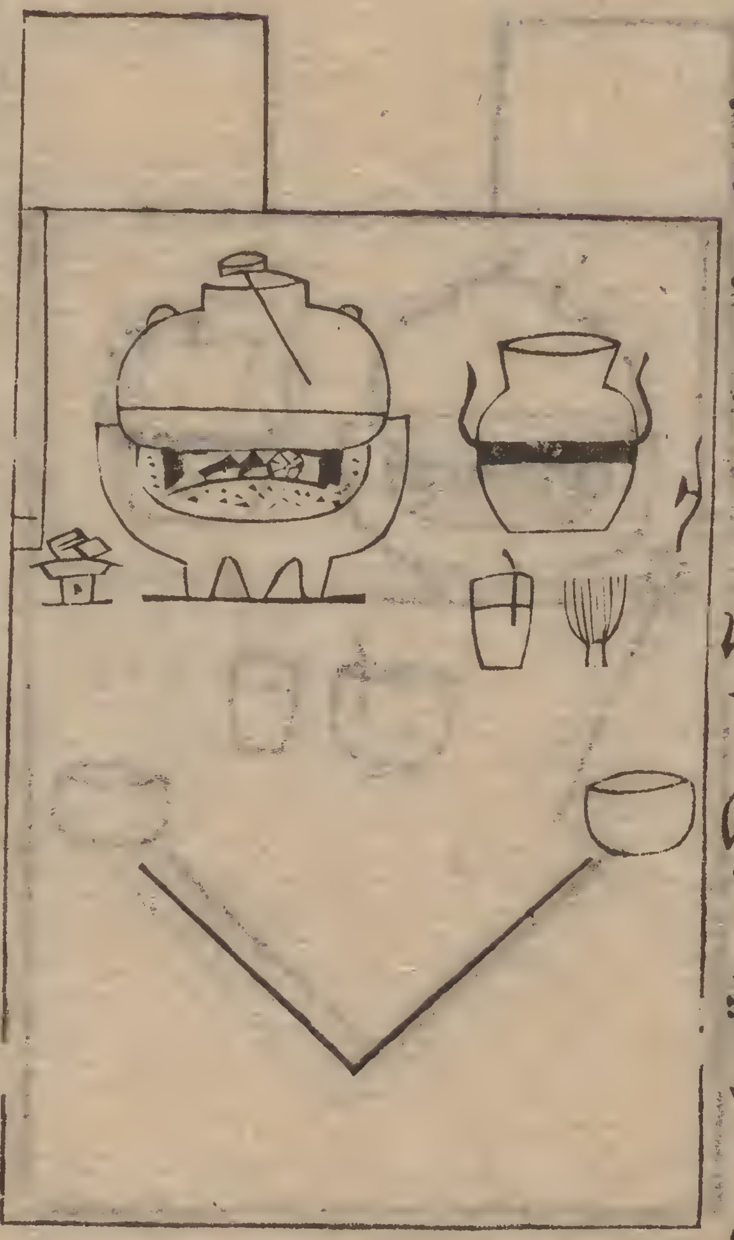
ひしやく蓋(フタ)置入持出如常居座(ズ)は小板のさきへよる一尺ほどすゝむ
是は茶巾にも居べしひしやくは蓋をきて小板通にすへしおく

さげ退て右へ以て何物も出バひとまへ置べし掛物うけた
めく茶碗をよし其後おゐて帛紗を出し中ひ如
く茶筌かざりて茶杓中ひらけ茶入を前へひらき右茶入の蓋を



帛紗をもちて茶巾茶入蓋をして置湯一すくいて茶碗に入
茶筅をすゝし茶碗にて手前にて置茶巾さきに
置きてゐる内またもて茶せん湯抜中ひとまて置茶巾

ふたをめ蓋へ置茶杓茶を入茶入の蓋しまる茶碗にかし
ま入其後水こぼし建水へ水指の蓋をしまひ湯一すくひ
茶碗をすゝぎ入茶筅をかへし水一すくいて置しまひめ
茶碗へ入ひろげうけ茶入をしまいて始る也客方へ出



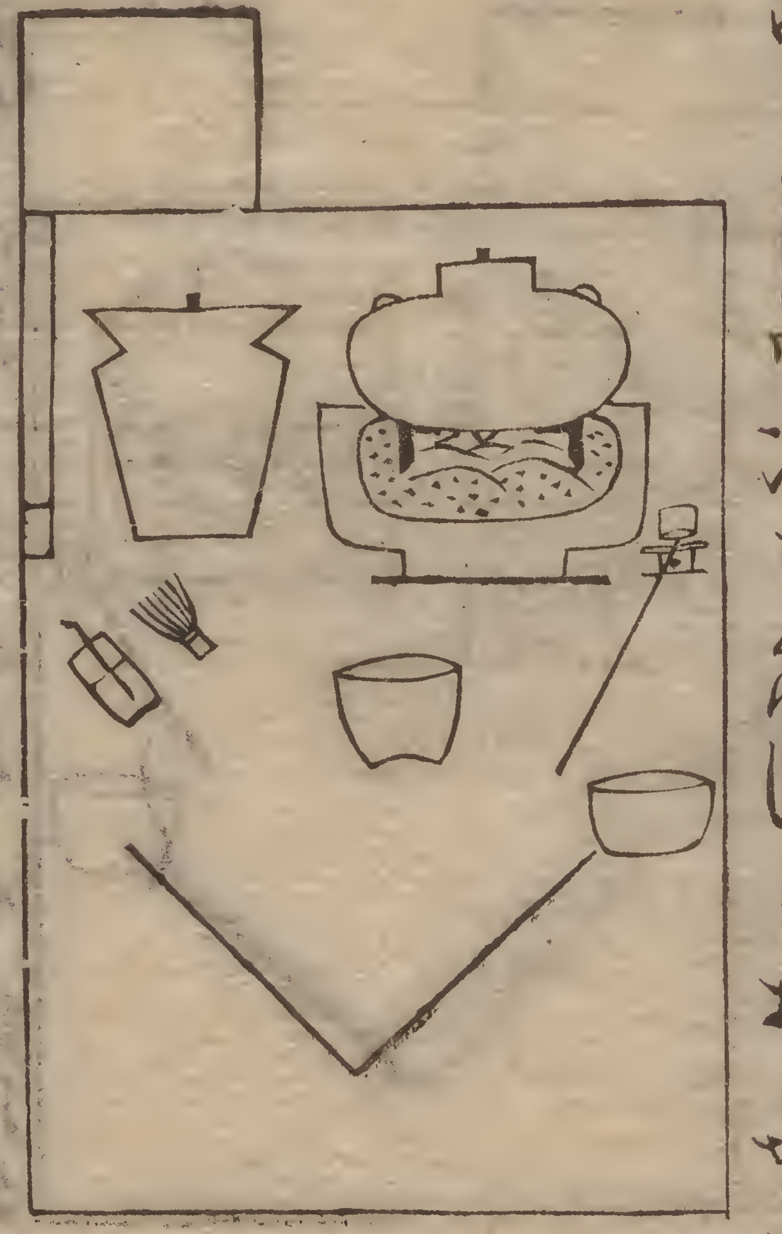
して後ハ客の好むべし ひきよせてふくむべし

一かはちまへくはすかよかゝる事なし　茶碗茶入ハ
きれハぬりの茶の内よい色あるよおくべし

逆勝手角風炉袋之事

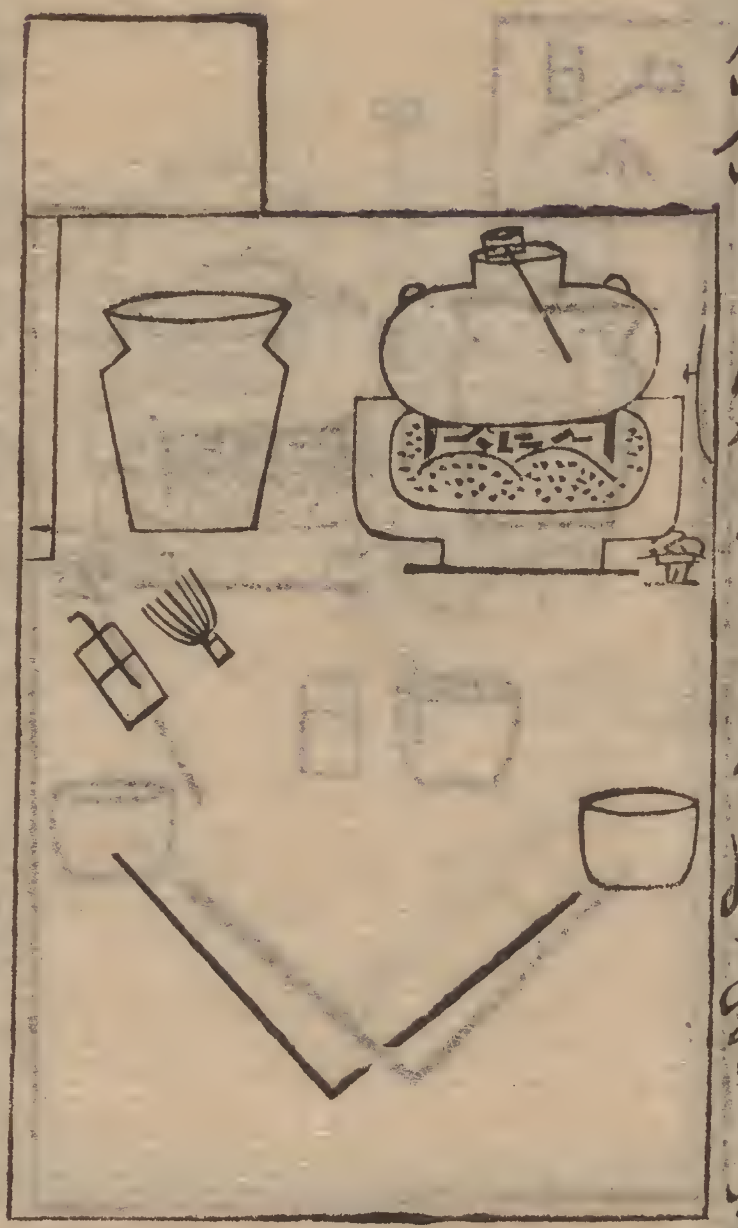
一丸窓大口の風炉也　常の土器を餝前のごとくして　又畳よ餝る
灰ハ風炉の内ハ大事の事ふひある事也　さりとて餝る事なるべし
八土器まへの灰よいろく仕るべし　当脇よ一方山二つ又一方
ハ山飾つ縁ハ立のぎるよちべし　小さき風炉ハなかへちぢき
かけることべし　又抱して是を猪ら菊よる事を存すし

おかざりけのある所に文をおかれもよかるべし
一此まにおかれ此まにおかざりある事もあるべし　茶
せんを水指に此三ツ中にて中次(ナカツギ)を飾(カザリ)置(オク)おけるを茶此



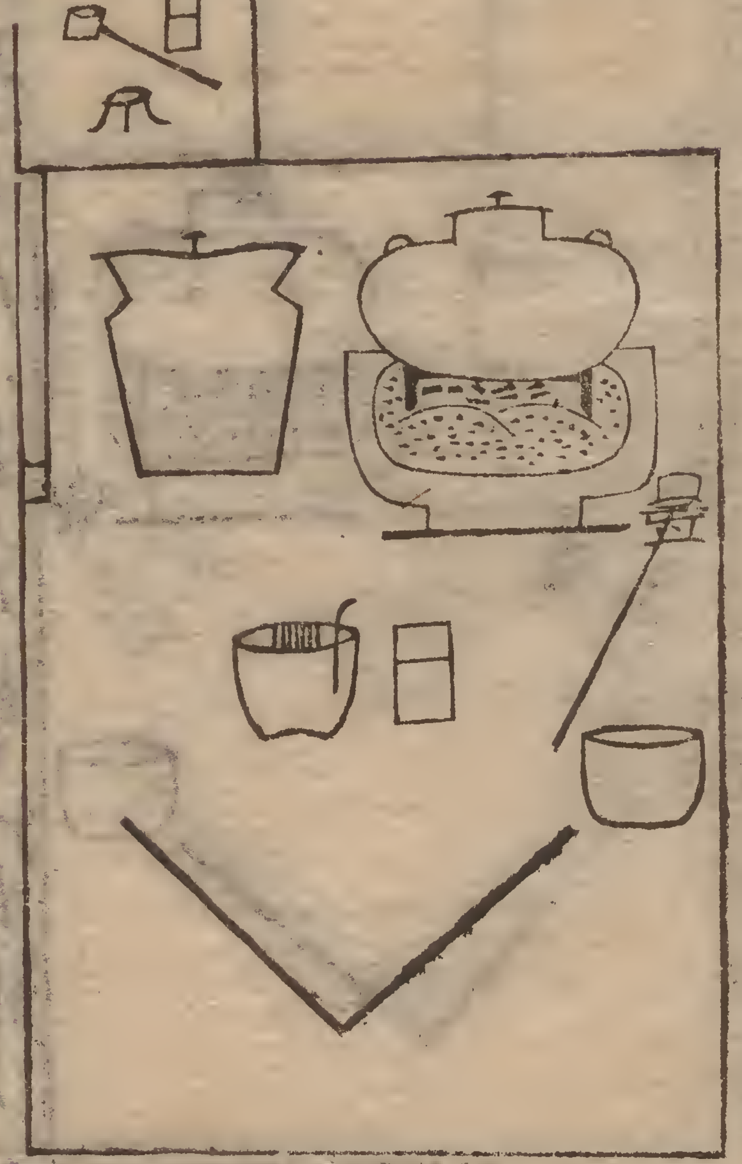
手前にて又にじりあがりて居所ハ右は柄杓(ヒシヤク)を
小板の上八寸先に此ひざハ小板通をおしべし　是又人なすまい

べし中次は置所ハひざのと七寸ありめ鏡(カガミ)は内の右メ此け置
べし茶碗ハ筋違(スヂカヘ)ありまたやうにすべし茶筅(セン)は小さぐ
曲尺(カネ)よくすべし　茶入ハあるまり鏡(カガミ)に此手前茶筅(セン)を

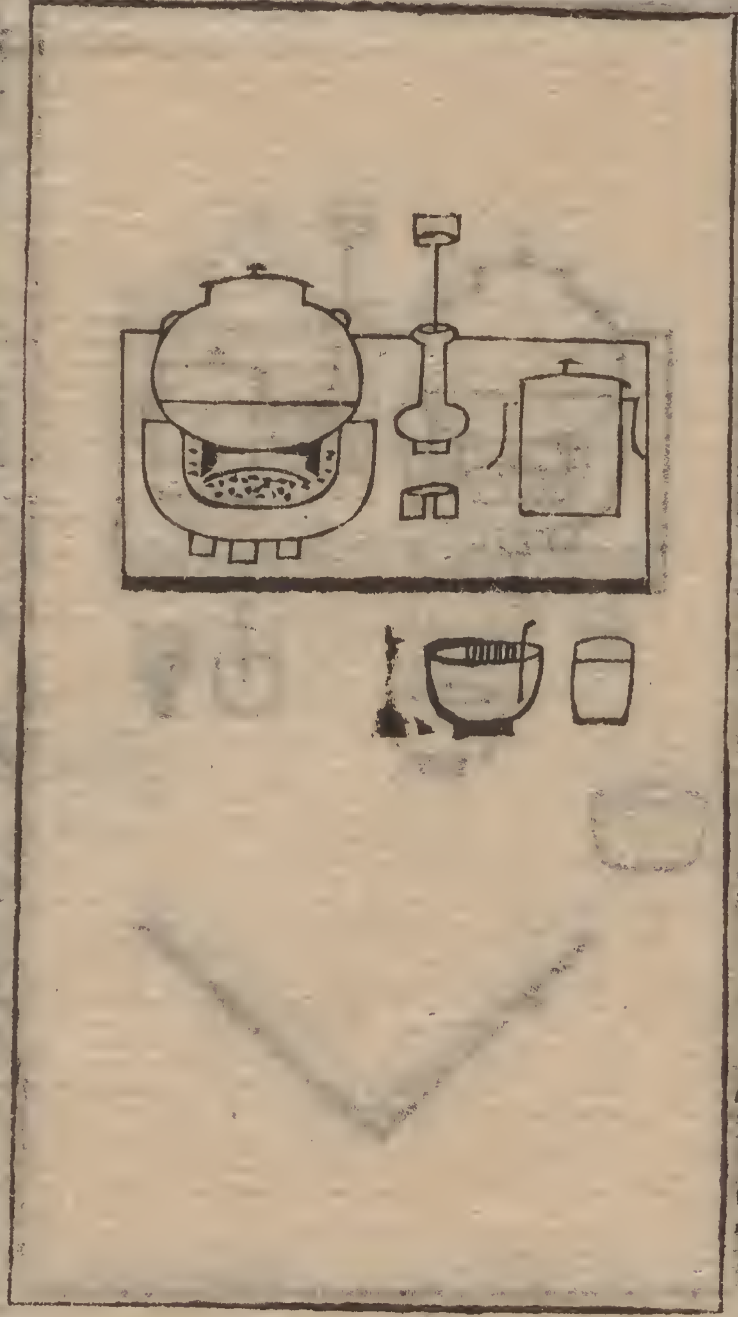


あるべき事也又茶杓(ソウ)之はけに逆(ギャク)勝手(カッテ)にする也ハ
出風炉(デフロ)にもある事なり之惣(ソウ)してかじまする一重(テウハン)半
のおで角(トク)にて台子(ダイス)の上にも長板(ナガイタ)にも風炉にても逆(ギャク)勝手

手前とハいふまじき之嫌(ヒエン)有に由ハせざる事なし之
一茶湯(ヨナメ)よひやく蓋置中次をこの組(クミ)にして棚(タナ)に上(アゲ)
おく事を何ぞ首(シユ)尾(ビ)によるべし

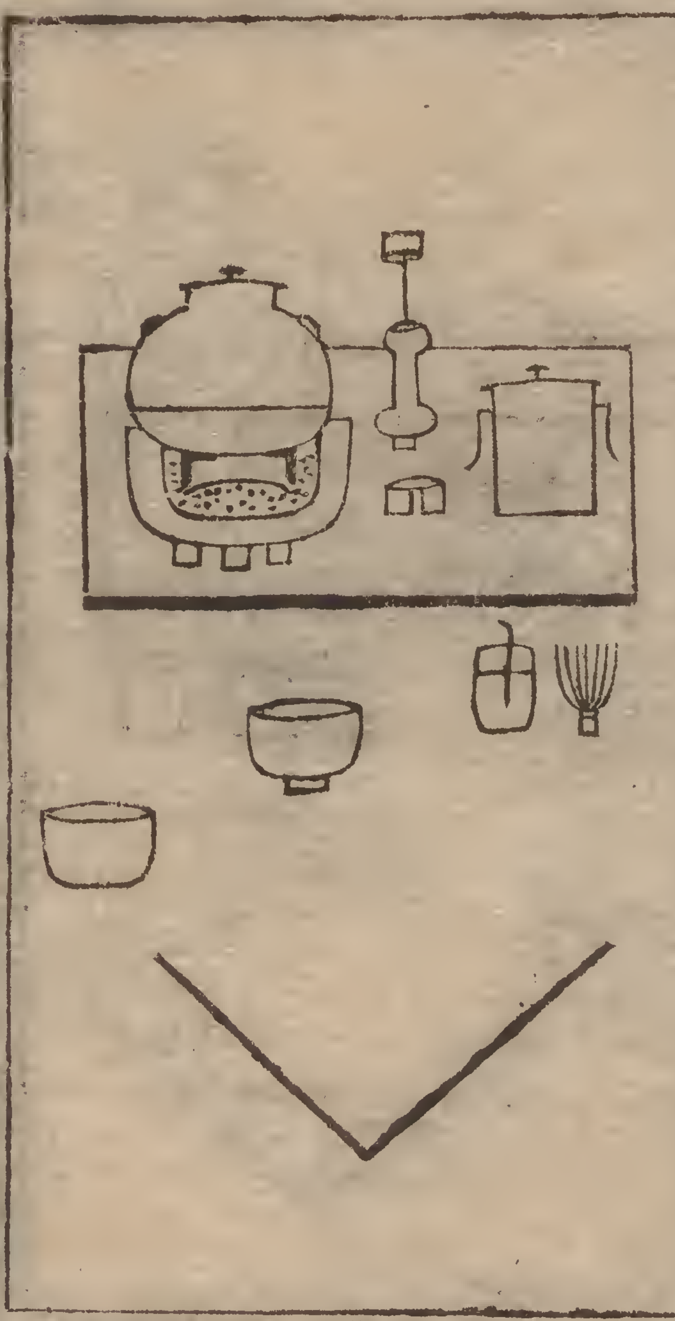


追り勝手に長板(ナガイタ)にお
一長板(ナガイタ)と總(イツ)八利休(リキウ)居士(コジ)代に台子(ダイス)の天井(テンジヤウ)を四代に板(ハン)を放て如
〆茶の飾(カザリ)もふとの世ゆ板ぞくらしくもる極めにとのうき等

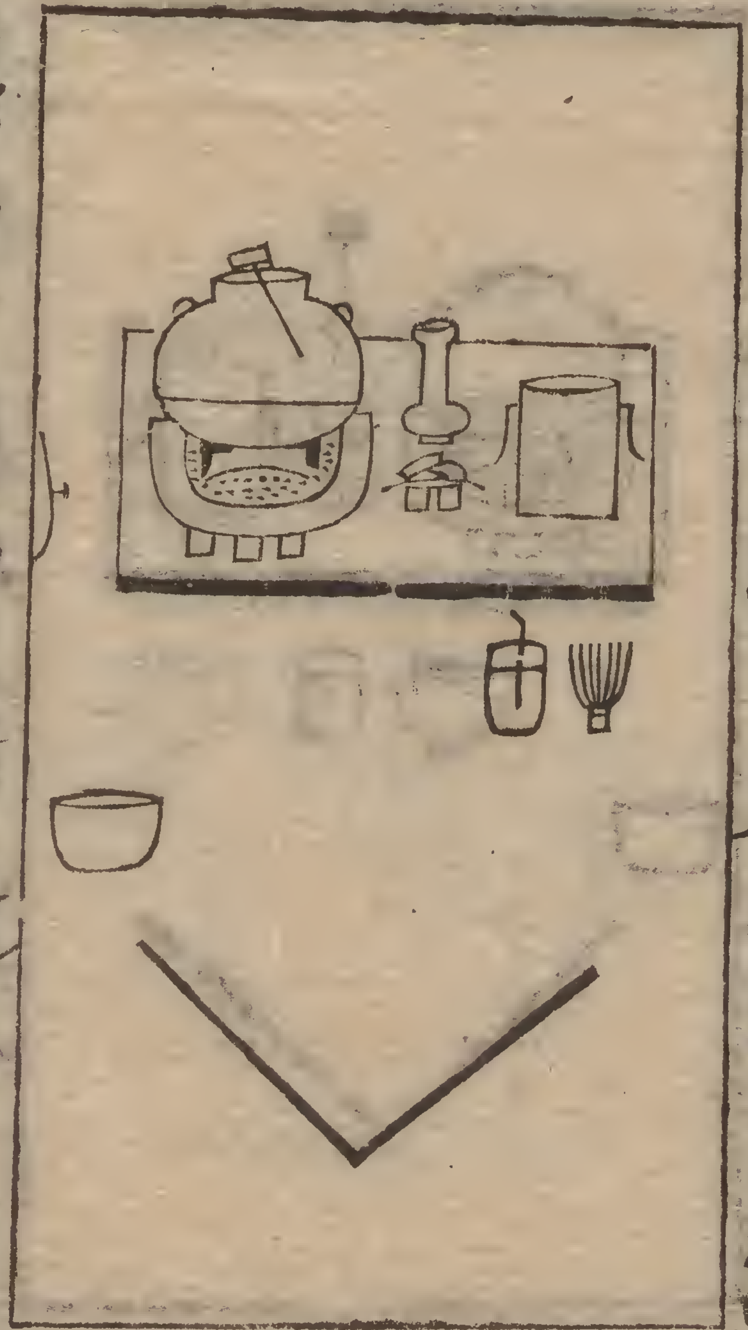


長さ四尺八寸より其巾ハ一尺四寸あまるに茶碗水指(ミズサシ)茶入
よ茶入飾(カザル)水こぼしもそぐを持出茶蓋いぞすひ板の間(アイダ)一
尺八寸ありて先の三(ミ)ツ巾之たてゞ茶碗を置板のまん中を

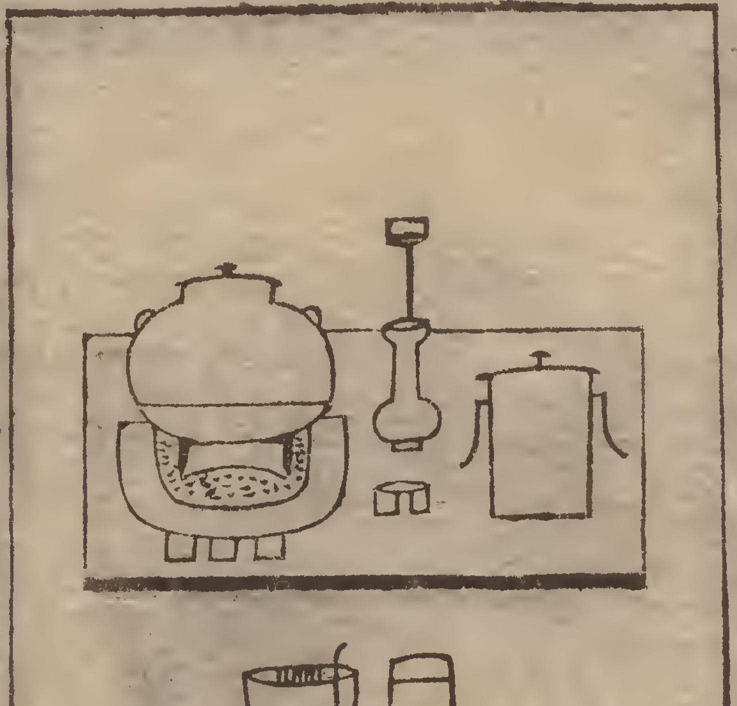
風炉の方へ寄(ヨセ)て扨おきおき帛解(フクサトキ)出しさばき巾
ひ常水指の上中を取て割(カリ)匙茶杓巾ひらけ茶筅(セン)等
らべ蓋置をも取出し杓(ヒシヤク)をも扨帛揉(コシ)よりさて茶巾
を取て柄杓蓋
杓上におき
ひしやく右にて
少し引上(スコシヒキアゲ)中など
を二服にぬるれ出し湯を少し茶碗に入ひしやく釜に懸(カケ)
茶碗のひしやくを茶筅(セン)を取湯通(トウジ)二三所して茶碗にこぼし下に置茶
巾取て茶碗を手にて茶碗取湯捨(ユステ)巾拭(ヌグ)ひ下に置茶巾



さても蓋に置きさして取出し等割(カリ)かとよして茶巾を
緒に入るるとして茶座(ザ)に飯(カヘ)し水指蓋を取出し
たくわけひくて湯を碗など入るよしこうしめ候
柄杓(ヒシヤク)を八分にて巾しけひて川細杓之茶筅(セン)取ざいくと湯を
のおへ出すを何(ナニ)ぬく點(タツ)るをも茶巾を茶巾にあるくる時ハ
何ほどもを茶巾たくおしあとふくさはるべし是等

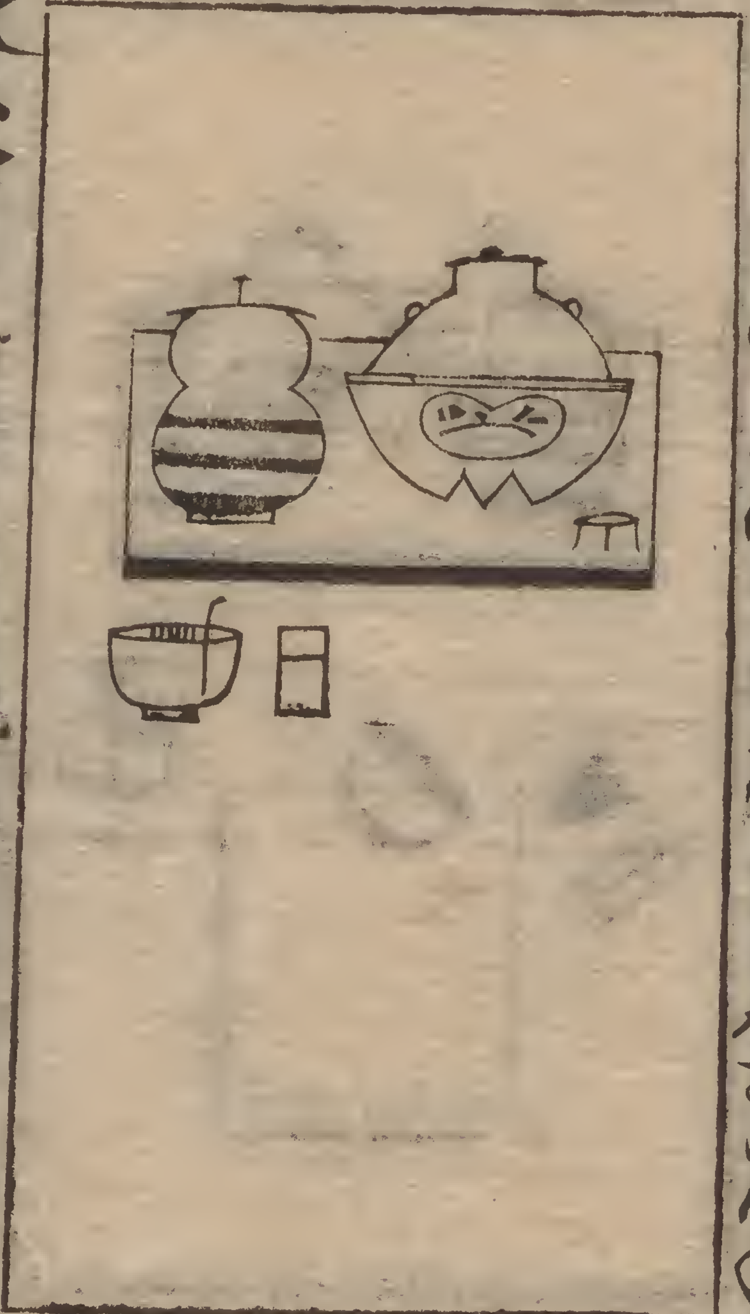


らひ之滴に茶碗餘るを湯をうぎさせとして又湯へ入水こぼし
をすゝぐハ茶碗に入まゝハ茶入へ菓子茶筅茶だハりを置
濁次しておく餘し湯捨茶巾中へ入下に置ける時ハ



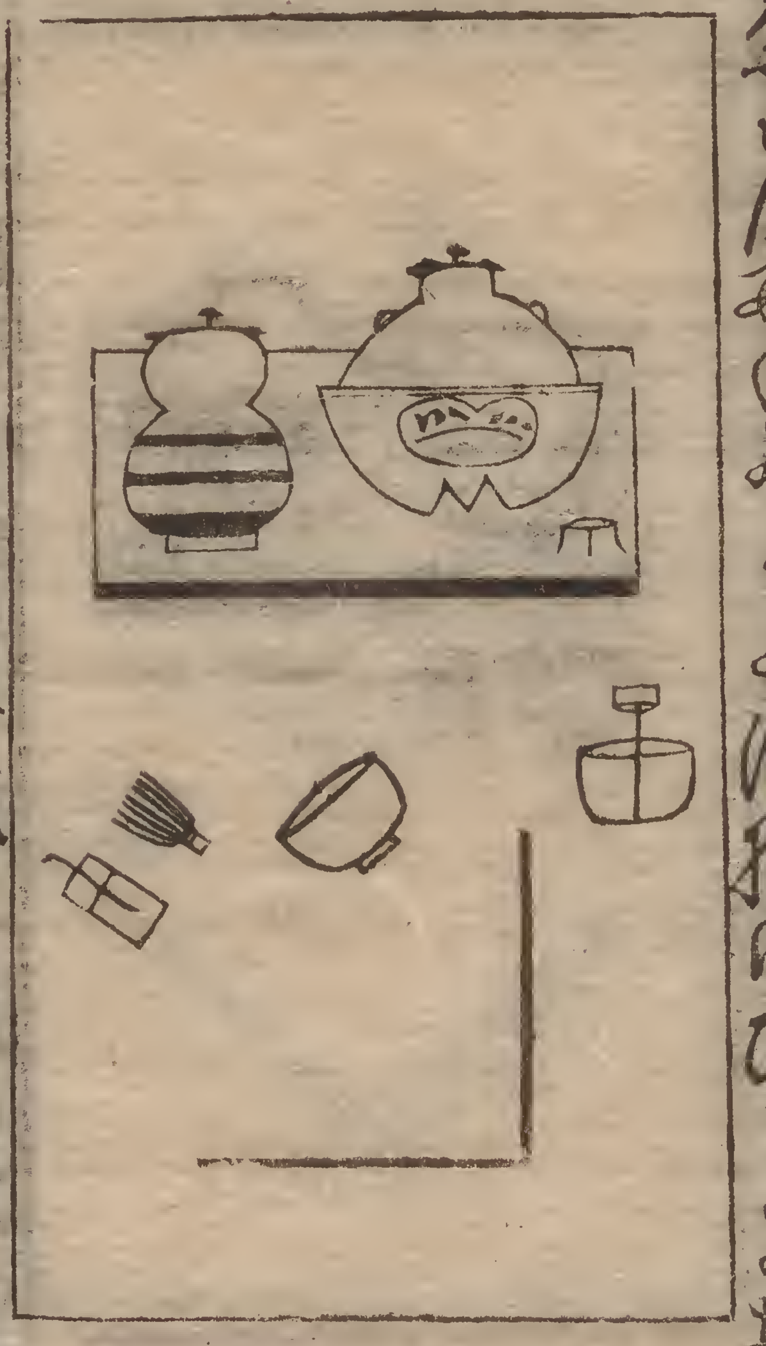
壺中を飾頭をうちにおくはてうへにおくべし茶巾ひ掛
おいてふべく茶入出し指蓋をとて拘杓指出きてかくる
のごはし後勝手へ立べし

逆勝手台板踏へまる
一ぶぐはまおれハかざりをおハ茶入之ハこぼしよひつく蓋
おき指出茶入いぜ袋ハ右はひざ板より八寸左の膝をき入



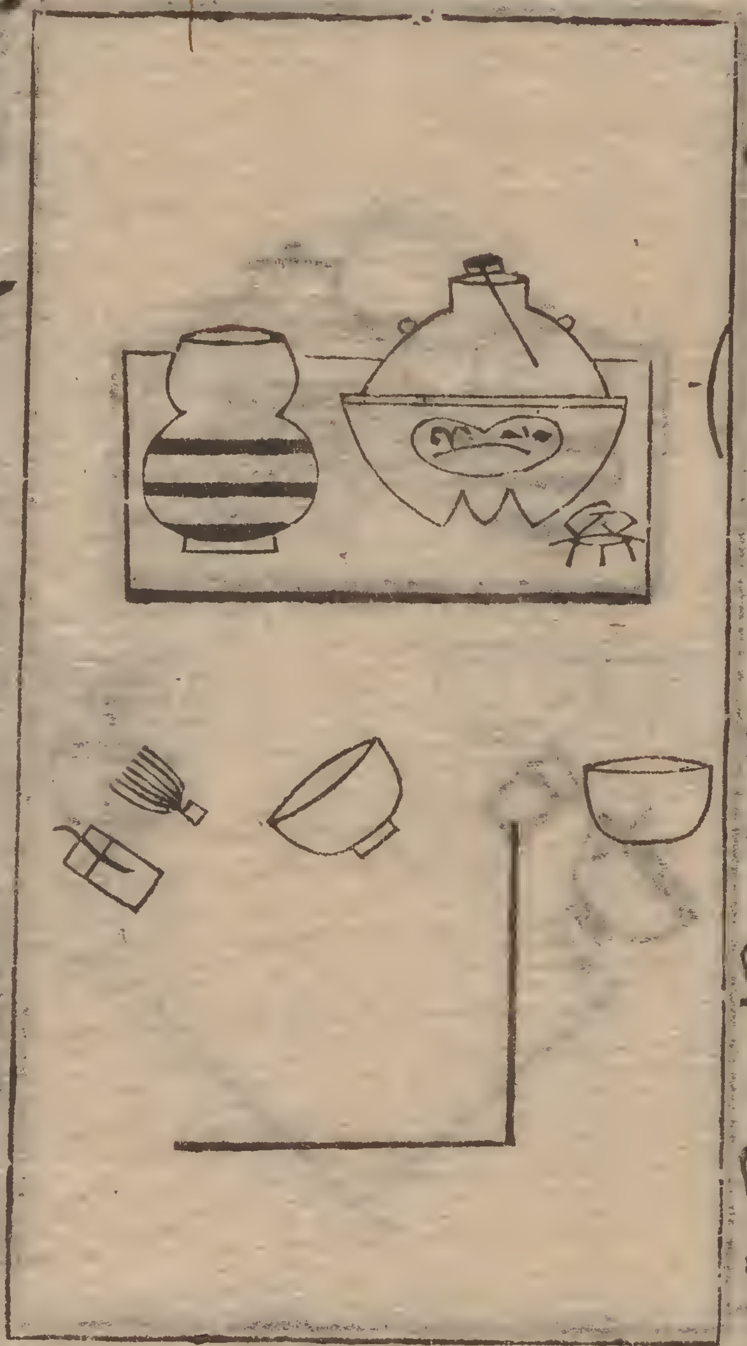
おすちなか方盤風炉中左のく茶碗在茶入並中次をおとの置
帛紗捌しいひ茶入をおすれ壺中に置茶杓ひけ茶
筅おかべおき茶碗茶筅とおくべ帛紗のく茶入蓋とでとまに

帛紗にてちきと茶巾上ひたし丸まし湯を入ひてをき
まけさ附おさびやくし茶筅湯次ニ印七あたまおさき
茶巾手にもり茶をたてん為に湯を手巾ひ下におき茶



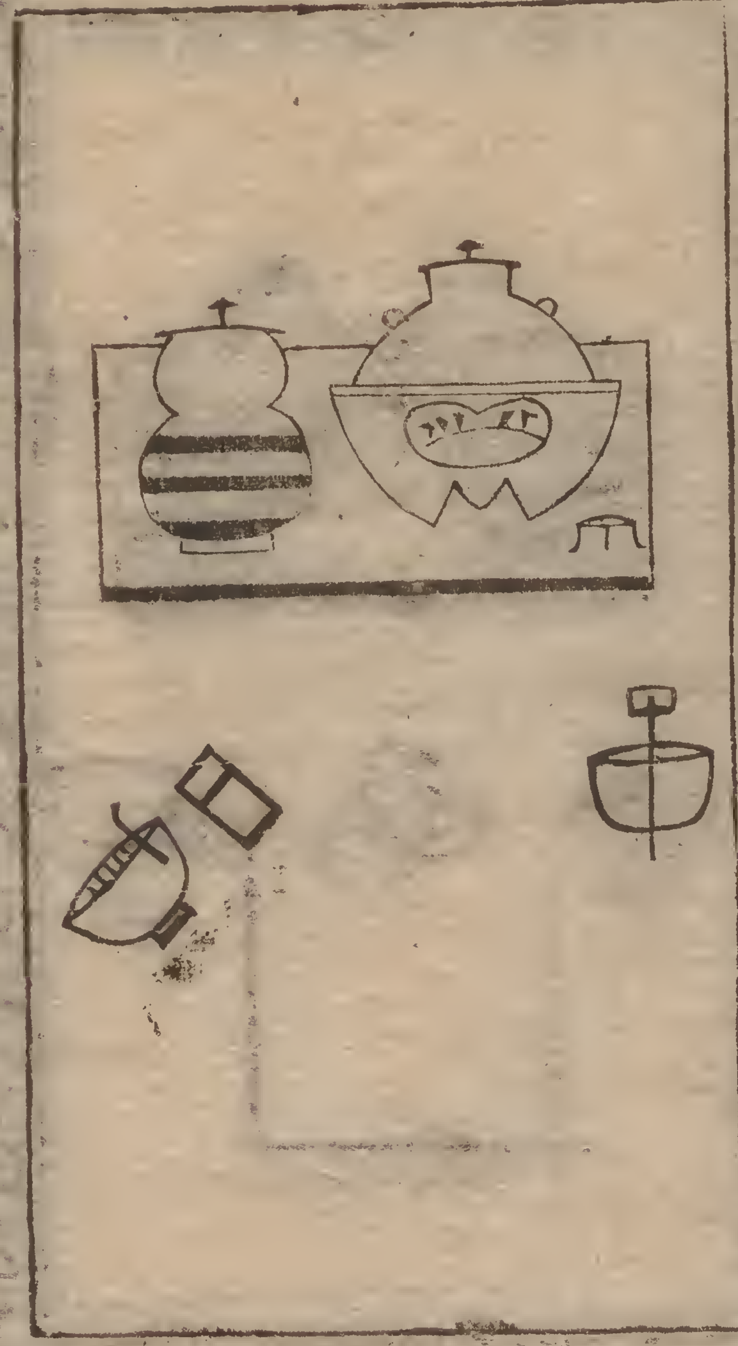
杓を柄杓を釜に置て茶碗を入あたすへし水指
蓋を取茶わ持ひて茶湯を絶ずに入水かゝめ茶を入
ひきじしてえ茶を茶さハくとふるはおまへにあくいめ

同しやうくめくたへし何ぬくもたあ付ハ湯をつぎ入
茶巾を取て鉢につよひしめおけ三度ハ膝ひてこと茶巾ハ
下に置茶巾を手にまくまてあ茶なおてのかよんべし



茶碗にて茶碗のそこを巾にてちくまきて蓋比へ入人を
大なるへきらるはおこを返くをてめるとるひを
さるとあへも絵もるへくよたびにかへくさいくと

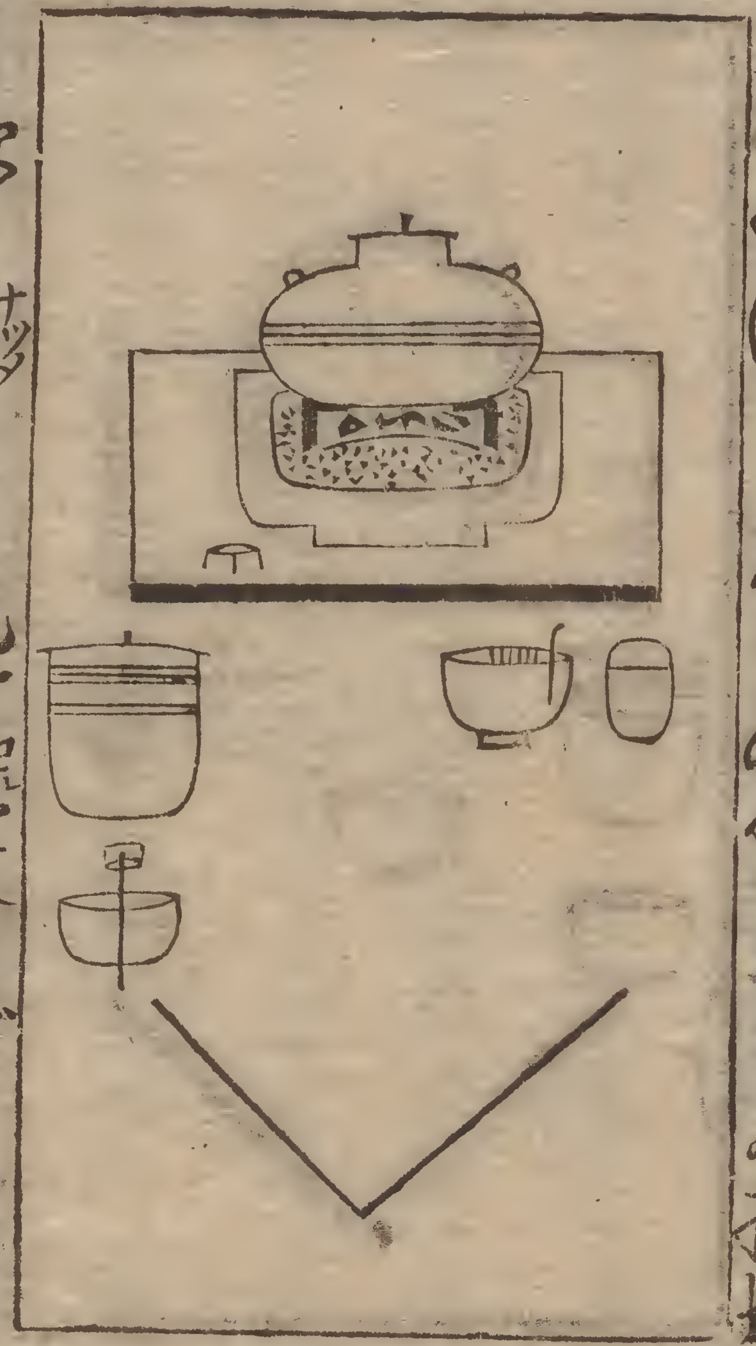
とらる之湯めよそ口あるまへし何も茶湯かさつけ指揃
も釜蓋に水をさすの時とももも茶に水をくるべく八つ口も
ほうもてちし湯飯しとして兆むし嗜れをこととして性まく



の建水を置ようにけたくべしまたさまにて中嗜茶碗を如二
二度目の水さし比べくるまでおくべし

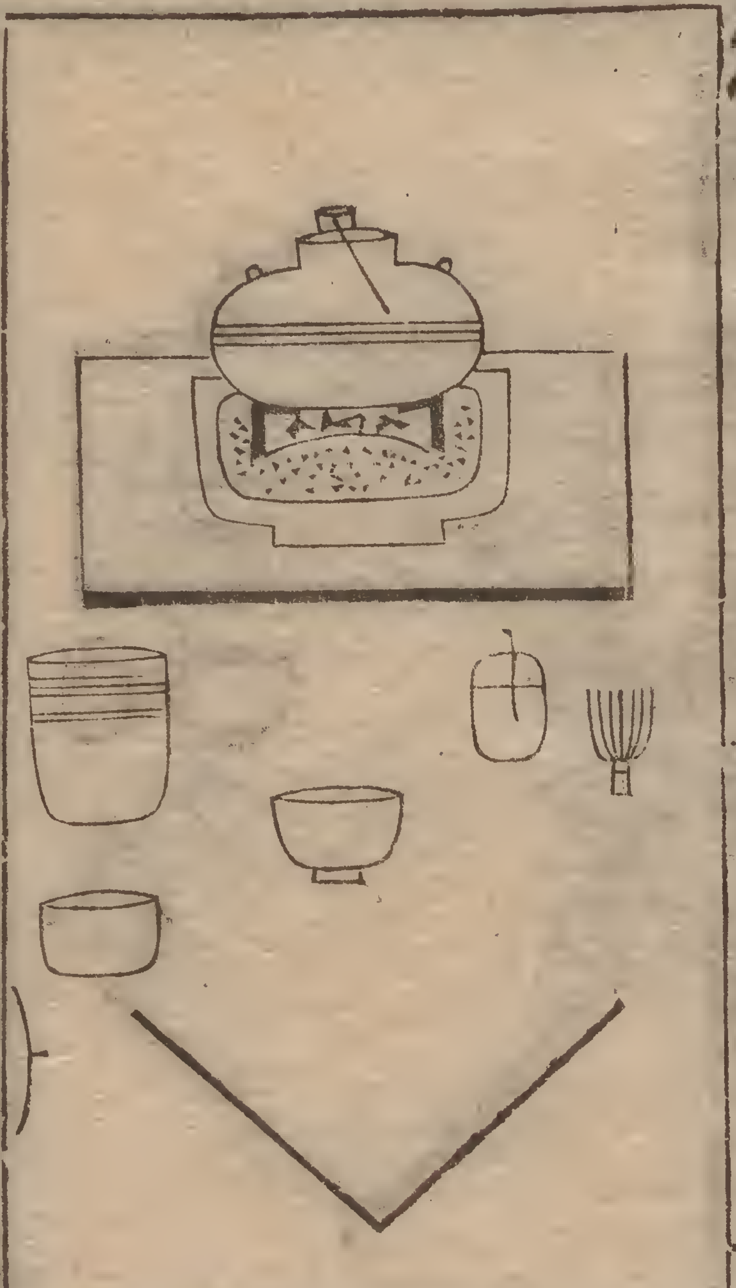
長板壹つ飾の手前

一 此壹つ飾と云ハ長板の中に風炉釜をおき飾之後に
水口を明け水指を据ほどよきあれ指をそろへ指ゝ置口ゝ



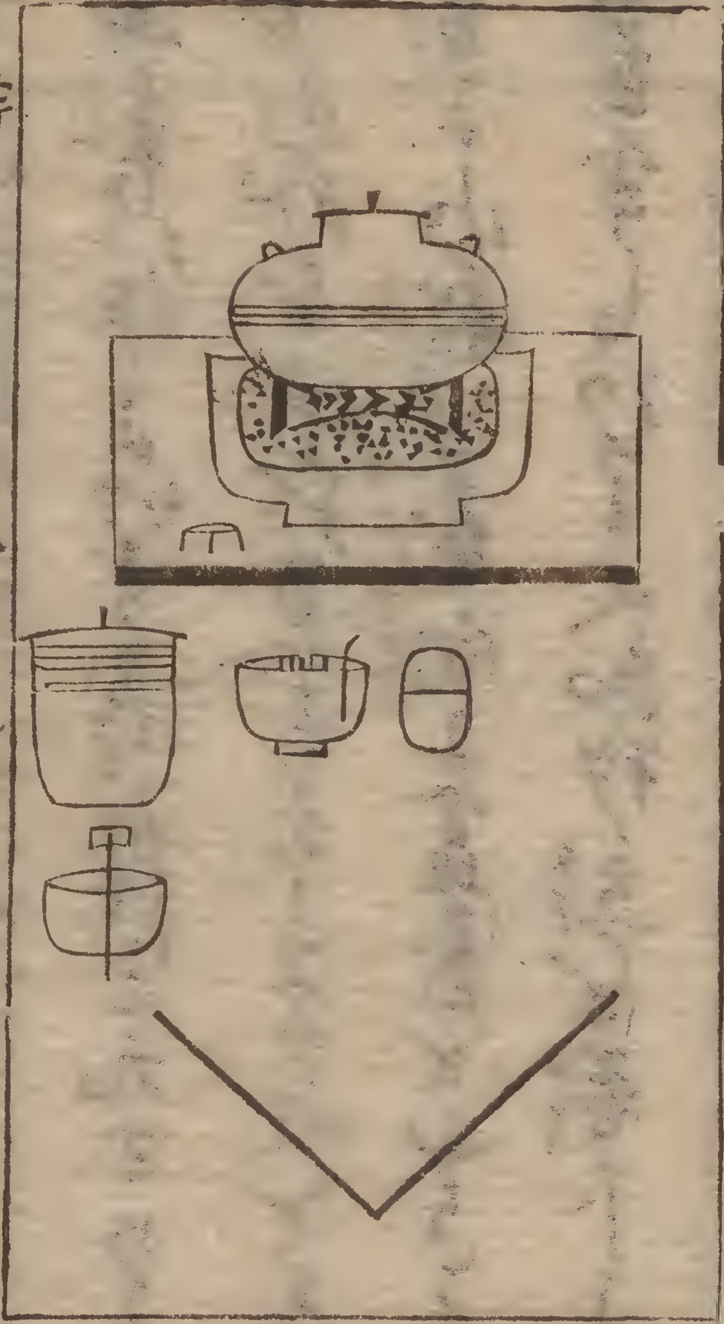
おくへよせおくべし次に棗茶碗を据比ほどよき指ゝ寄ゝ八
茶碗よりかまへ指揃茶器置べし次に水翻をひやく置指ゝ
いつでもひ茶筅ちやきすによおるべし茶碗毛乳中ひ

出しかゞみて茶杓（サシャク）巾ひろげ茶筅（セン）出てたゝみ引（ヒキ）さげ帛し
茶碗蓋取茶巾上（アゲ）ひらき尤めく取ちらし杓（ヒシャク）し湯入さき
かりて之茶筅（セン）取ちらしにかけて茶巾出ぼうして出る茶



碗に湯捻（ネヂ）巾ひ茶杓ふれ出しれ茶を持たてよ入水指（サシ）
蓋（フタ）を取出し茶筅ひらき湯をいれ茶を入水にあ発
茶入にれしてびらきて之茶茶筅（セン）取はつくと如くおなじき（キャク）へよ

あるべし付（ナン）かぶくあくし右比とくあり
一 湯（ヨリ）め茶碗出る湯（ニ）を入さきゞして又湯を入れまうし入
まうし八茶と入おきびらくし茶筅出ぼうくと茶湯（トウ）



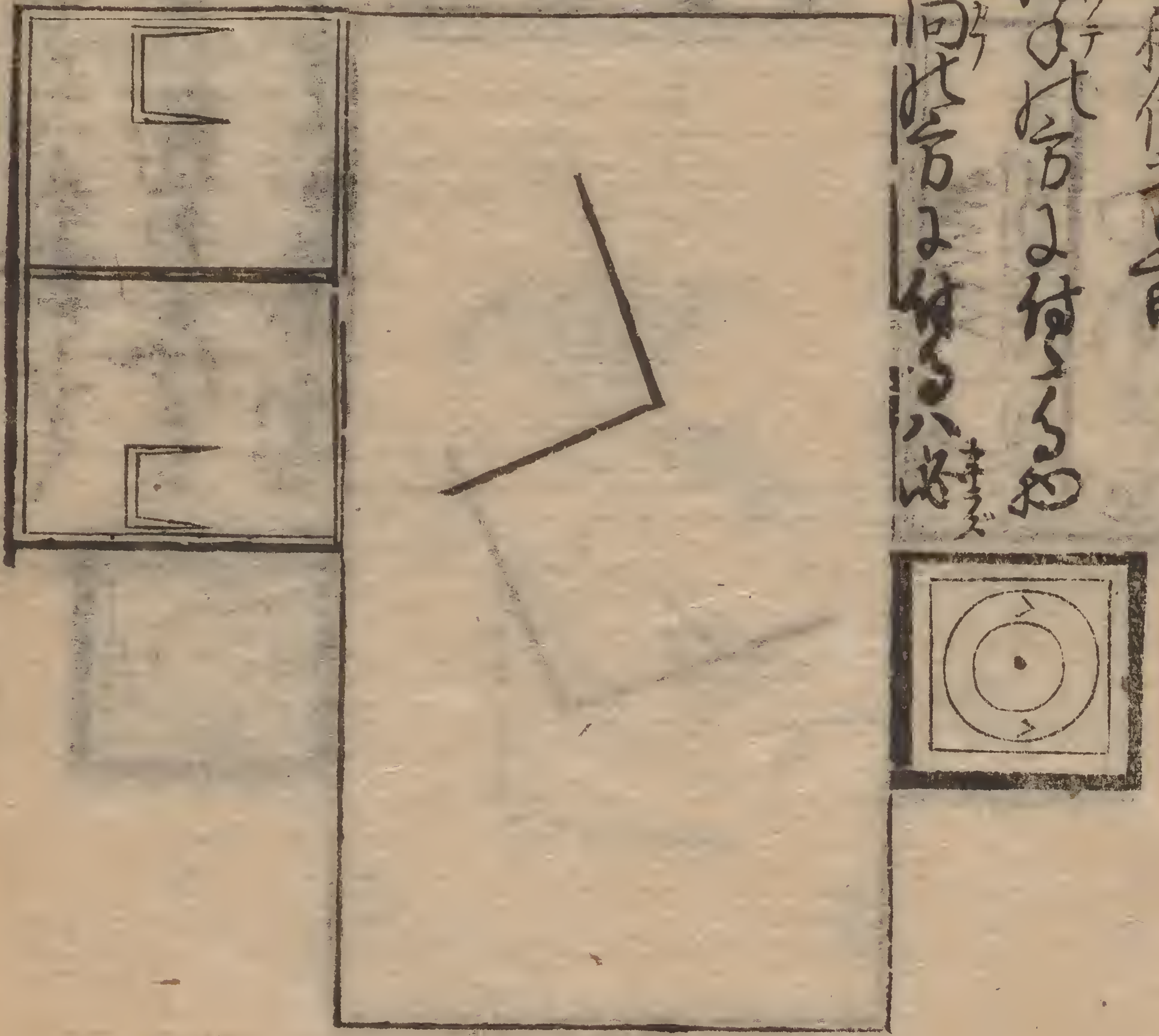
次（ジ）ぎりて湯を捻（ネヂ）茶巾取入茶巾取入茶杓巾ひらけ出
引茶碗と並べ飾（カザリ）水と茶つらし茶は蓋を置べし
ひかく八水次しま置り指（サシ）蓋を置べしあと所にゐ水翻（コボシ）を

おしつめ茶碗と見込へ水指も見入ぬところを見て紙を
置し御此ありて茶碗の外水ごぼしあとを中へ猶
たるべし

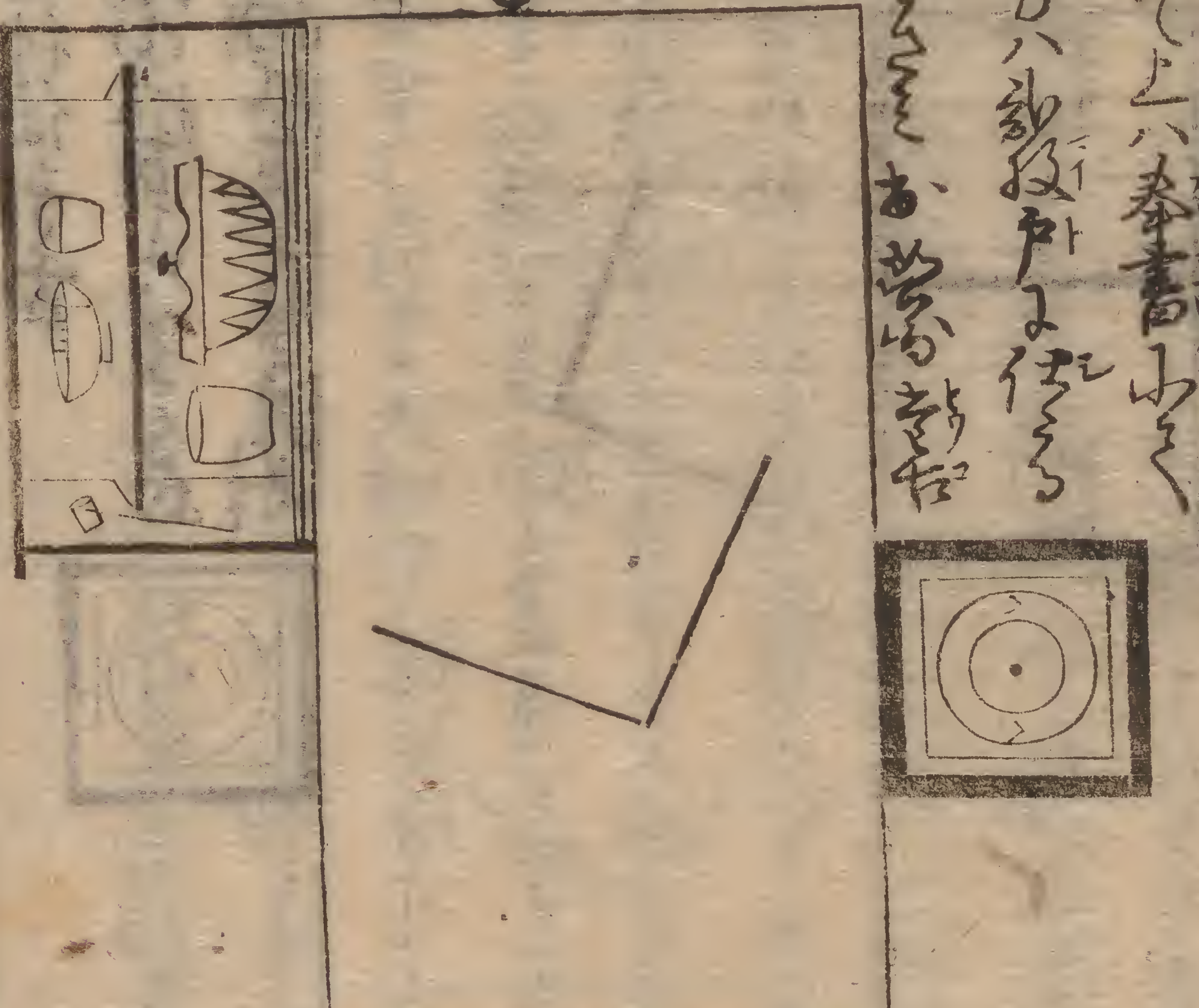
一しけ半程を四畳半の茶席に炉よりかざる時炉先と九すめにおき客
方へ点茶の水指を茶の湯有ハ茶の茶碗を手前に
ばら持出る時に水翻を道具に向て蓋置をおきさてつかひ
しかくを棚に建ても引て又柄杓を蓋置下に置てさ
脇に水翻をおきさて茶碗をこびに持出る事も同じこと
かくの時此ありきに其床に逆手を向し心此かざる也
口伝多し

四畳半利休茶室

一 堂古とと云ハ勝手に此方に付たる也
之を定席に八向の方に付る八畳ハ
利休茶古吉織
部古とハかたくば
き此仕ふくさ也
本古とあとには
たるもとも勝
手水方之古おハ
此方ハ障子あく



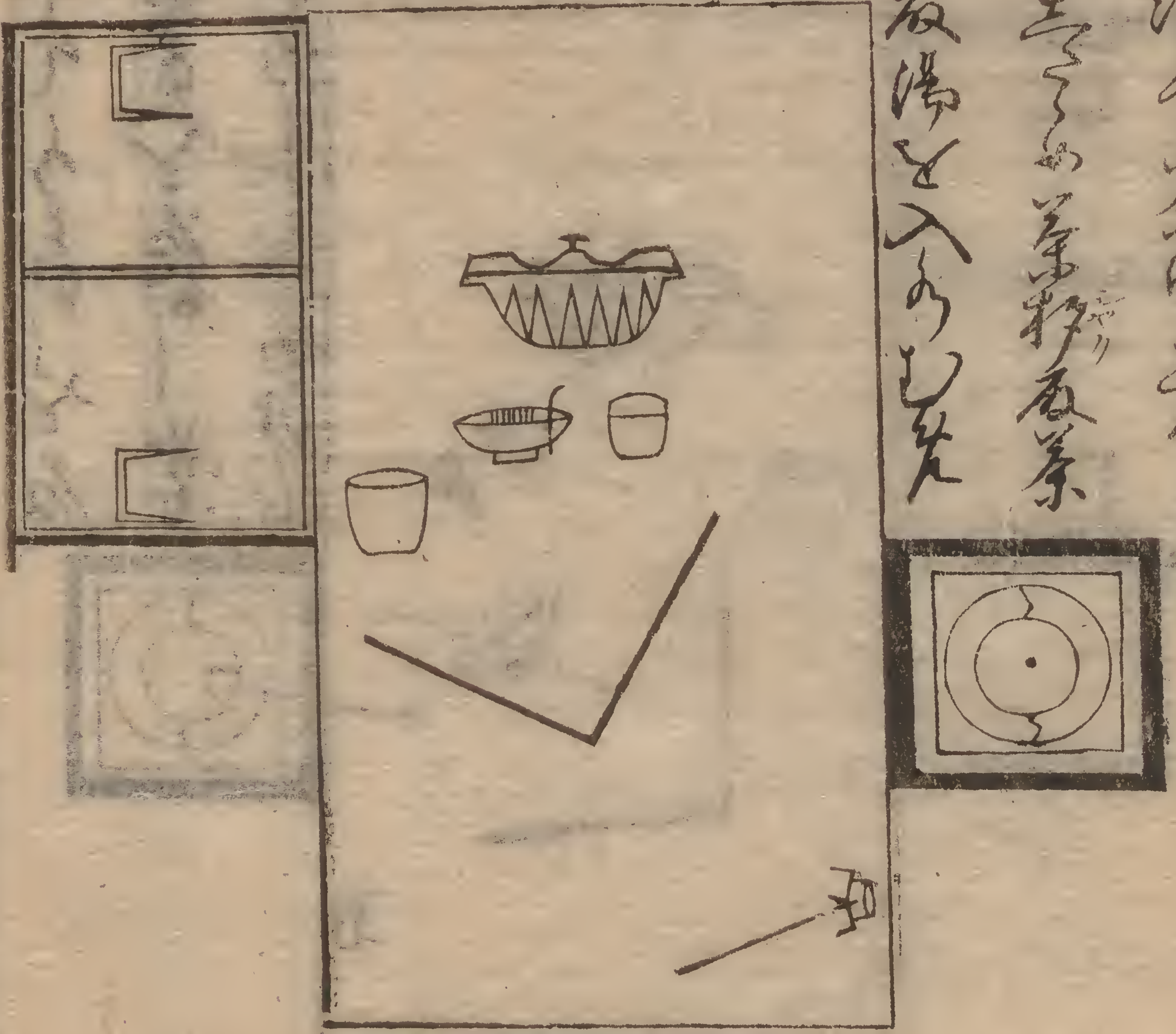
たいこをよくして上ハ奉書ふくさ
張たる也ほど呂八鉢戸よ仕たる
趣之腰よ帛をもつて お茶杓
方へ居る障子
をあけ寄
あがり茶碗 居
さて水指をだし
茶碗と飾
戸をあけおく
ふあおれ方と明



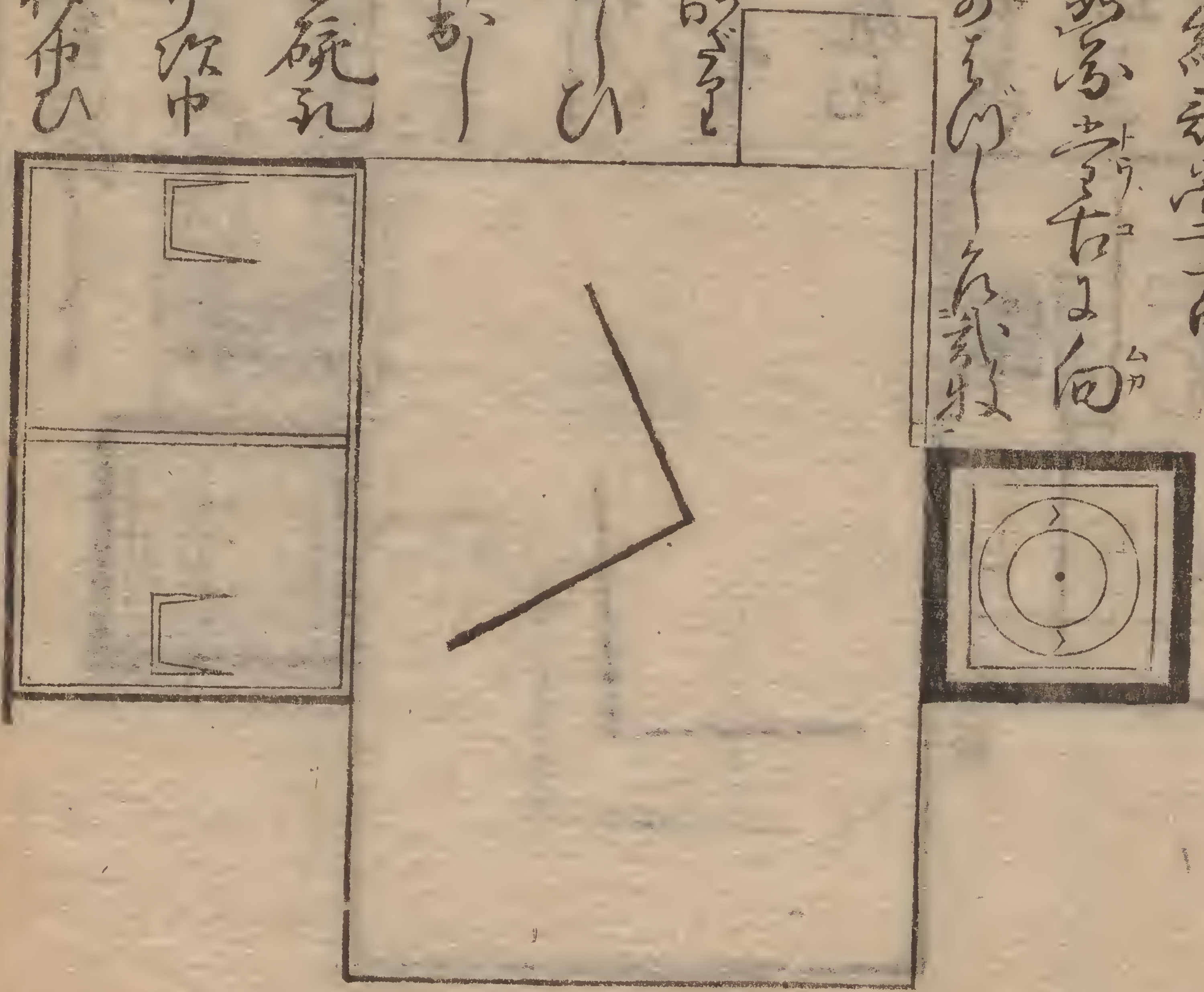
おき居りをしてそのそばをを取
おしゆる蓋置を取おし棚
おきひしやくをかけしけあけ
たる所ととる
たのべしたし
茶碗を取棚
出しそゆい飾茶
杓け茶入荘
茶碗棗し柄杓
取茶杓蓋を一応

[illegible]

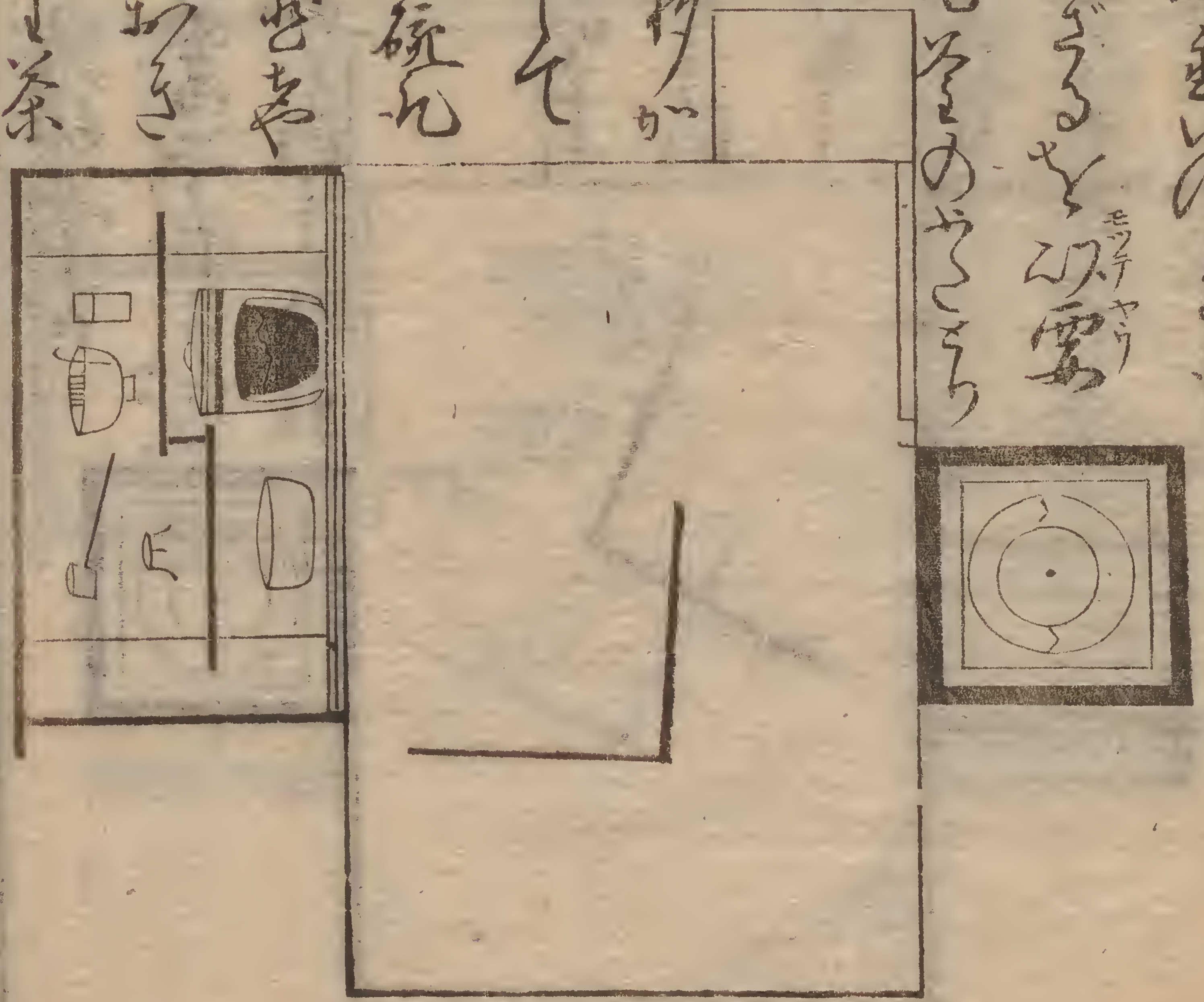
湯を入茶碗に湯こぼして茶巾をしぼり
湯捨巾ひ茶巾をたゝみ茶杓を茶
を入出すかゝる蓋を取湯を入のも先
茶入を取納る物お
を取かへ片付へ
心を湯めをかへは
其まゝ戸をたてり
出て茶入を
入へし茶道口の戸を
ふちもとへ入るゝ



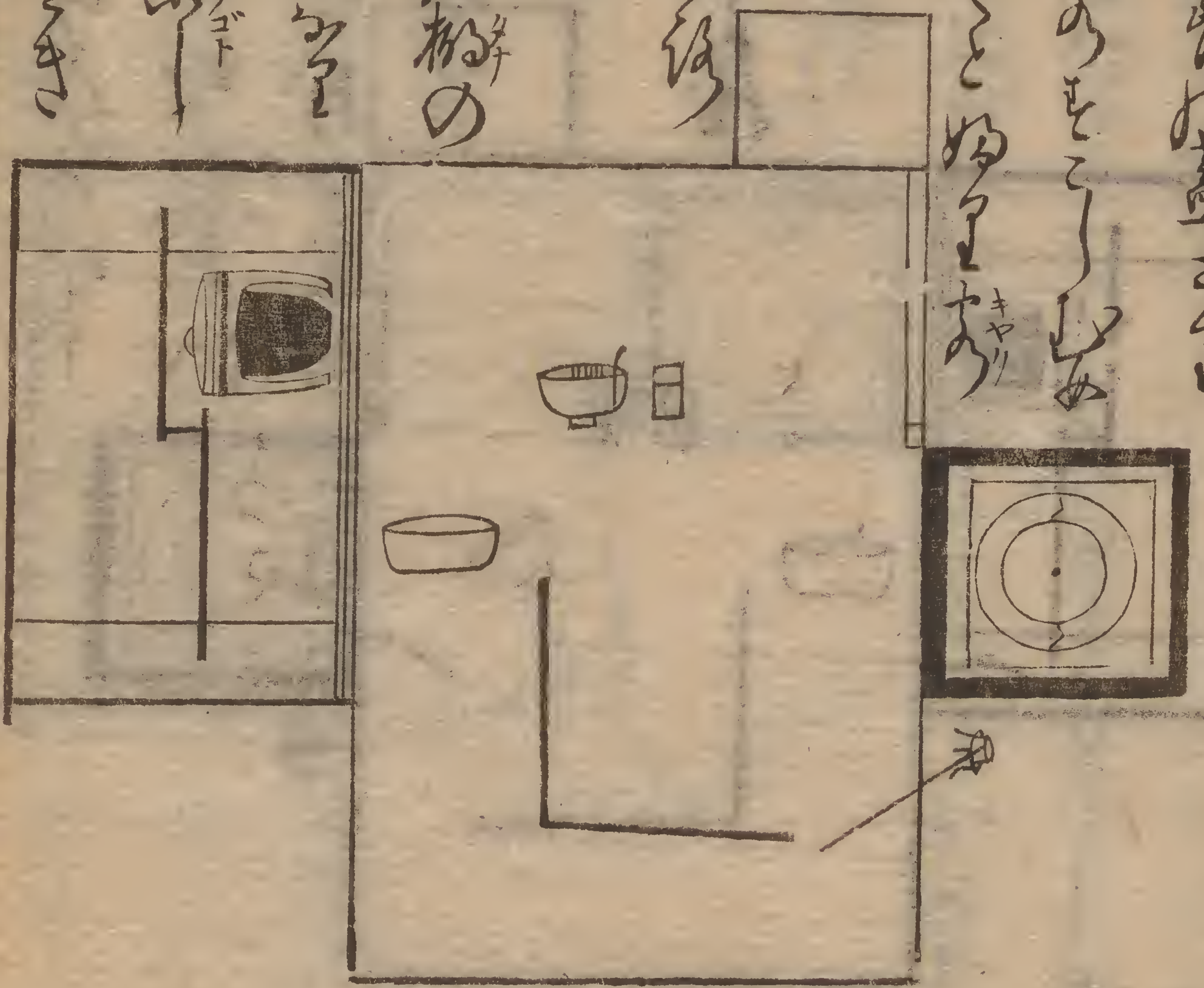
三畳太鼓　織部堂古
一帛腰にさして茶碗を湯に向
ひ明ケ置をまはしてしれ茶杓
勝手へ持出べし
中次茶碗を持出水さし
か建水蓋置をおろし
柄杓をかけ水さしおし
居ひをなおる茶碗乳
おし帛さばき中次巾
ひ出す茶杓巾ひ



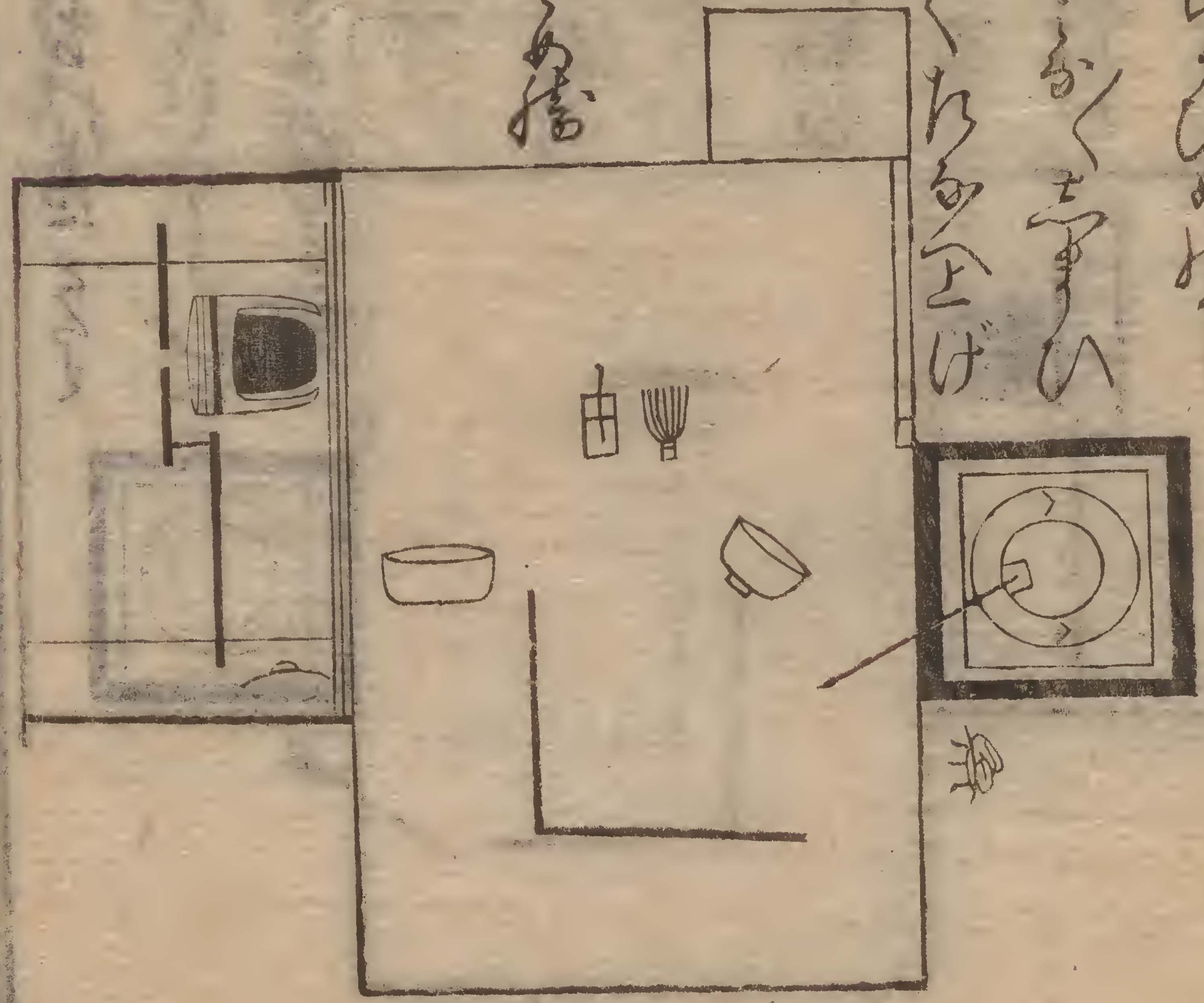
かけ茶入もゑへ盆のうへにも
跡よりハ水さしに付たるを以遣
ことにあるかりてくれ置のやうにそろ
茶巾ふけ湯を
とり茶碗に入物なかが
まりうけ湯返しふして
茶巾ふきて茶碗に
湯捨巾ひ下にあるや
巾ふきてあ蓋にかき
茶杓を少かた茶



を茶筅次に入水翻に蓋ふるまと
置香湯を入ておりしかな
茶を取出たる也をとめるまあり
まへに薄茶を行
なくもくけさてもる
ふくたたべし
一水はし此釜向勝手の
下にあるがし方様にて
茶巾ふる由に外し
一方釜々この及べき

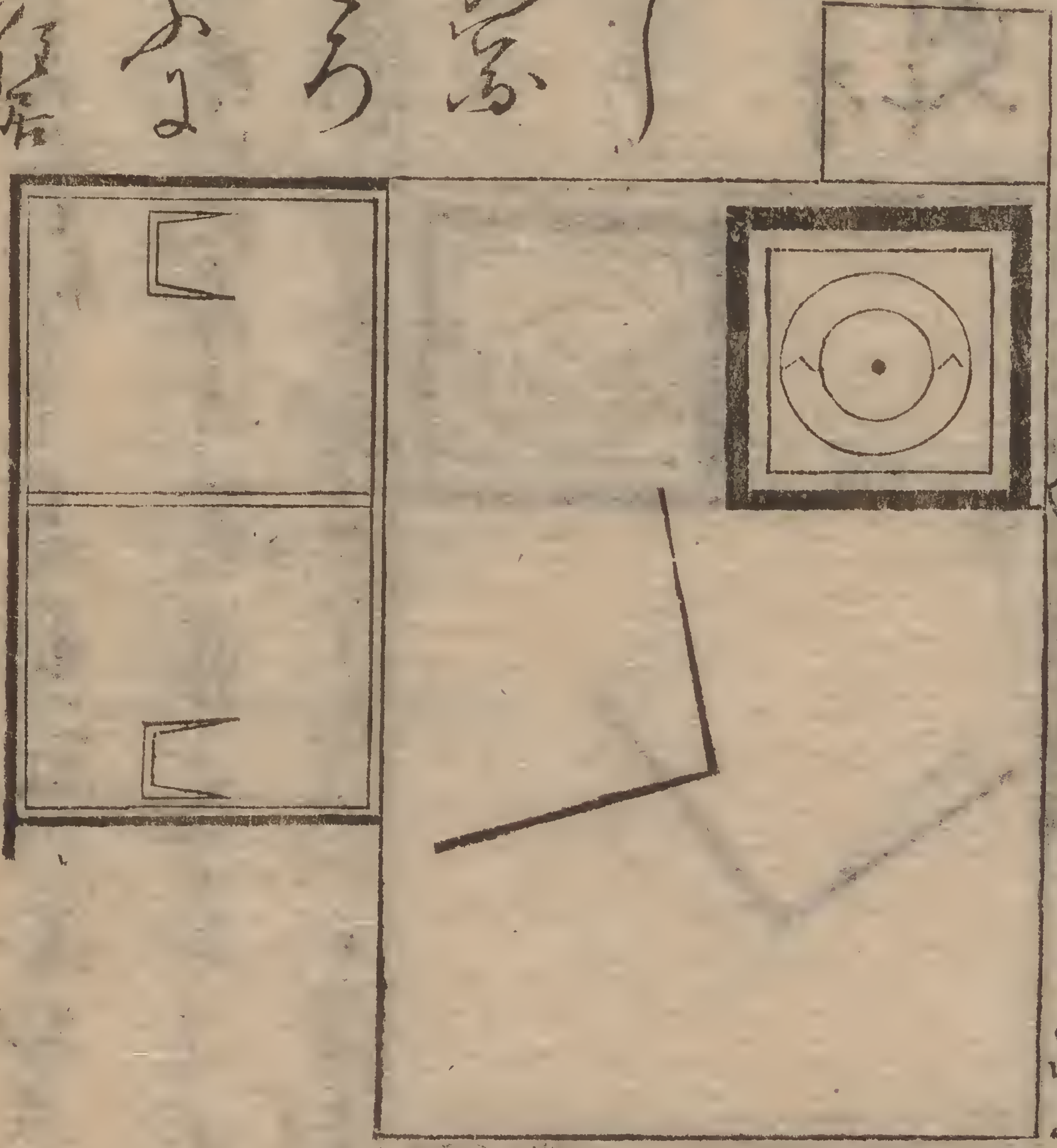


時たゞ此茶巾ちがひめ付ト
よおくべし溜(ヨウ)めなくきまへ
あ此(ダイ)かづらなれとくれなゐ上げ
積よりなる障子(シヤウジ)
と詰ひこもよ
こまをとり此くなる掃
手へ入べし

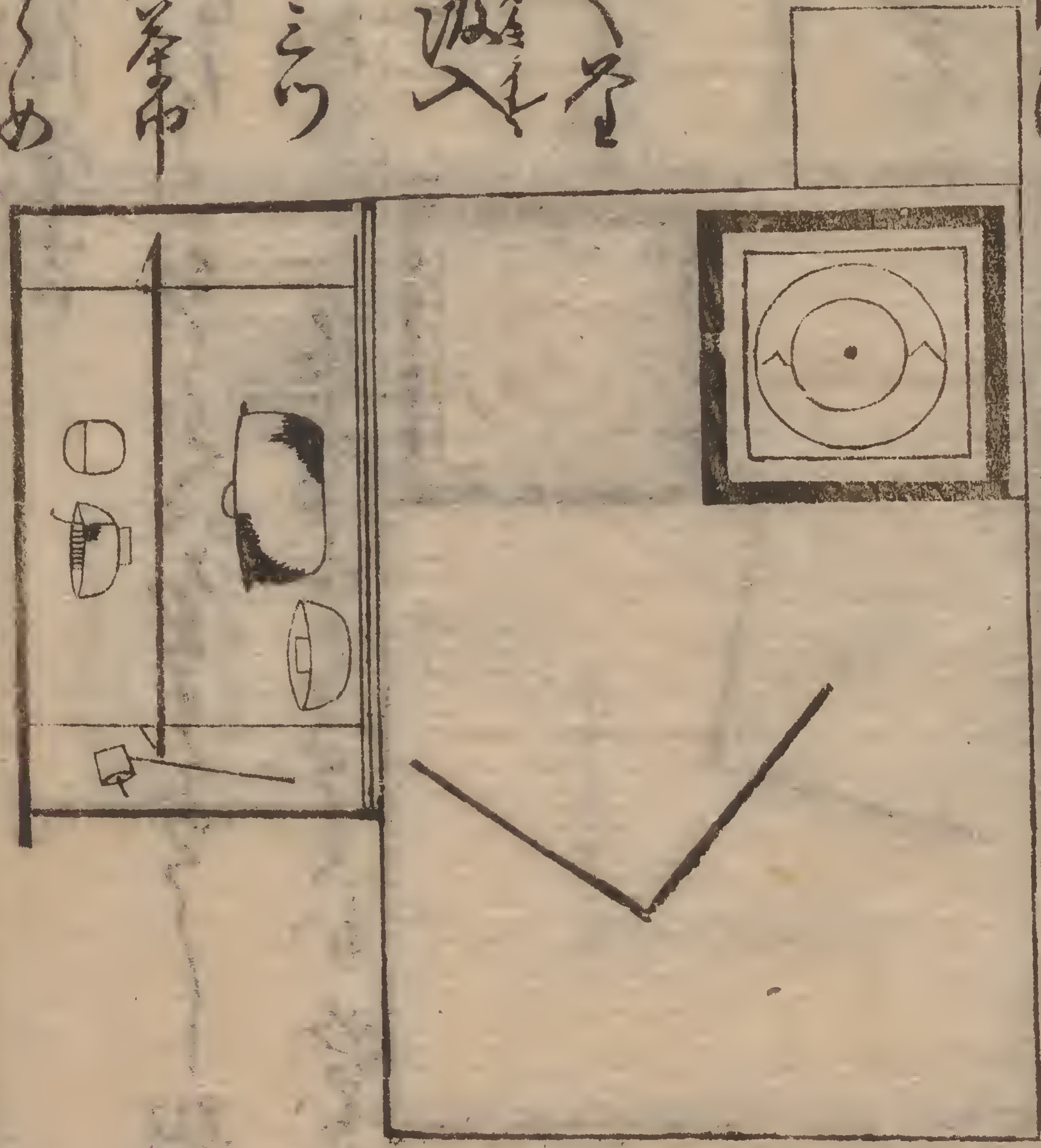


一畳半(デウハン)利休(リキウ)堂古(ドウコ)

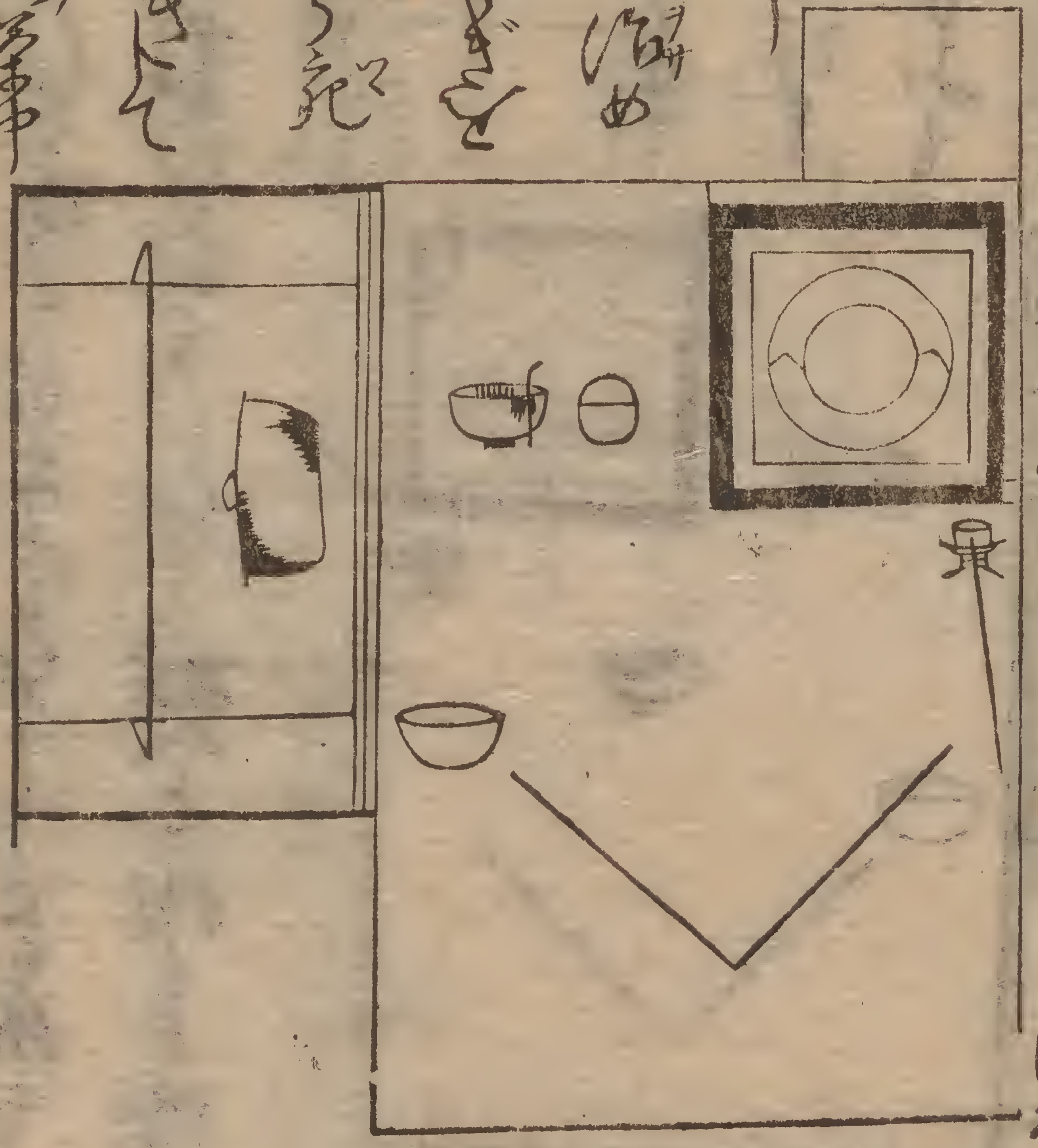
一畳半ハ利休だくしなくさくハ爰にかくし釣しそが
目(ニ)此つまだゝる地ゆへ之帛紗よそ〻くお世話だゝこ
り向(ムカ)ひ亜方、か
障子(シヤウジ)をあけさせ
まへし樹よへおし
出しや碗を取出茶
茶壺(ツボ)此あまごころ
よろしハもとし向(ムカ)ふよ
おきそるが横(ヨコ)掛い候居



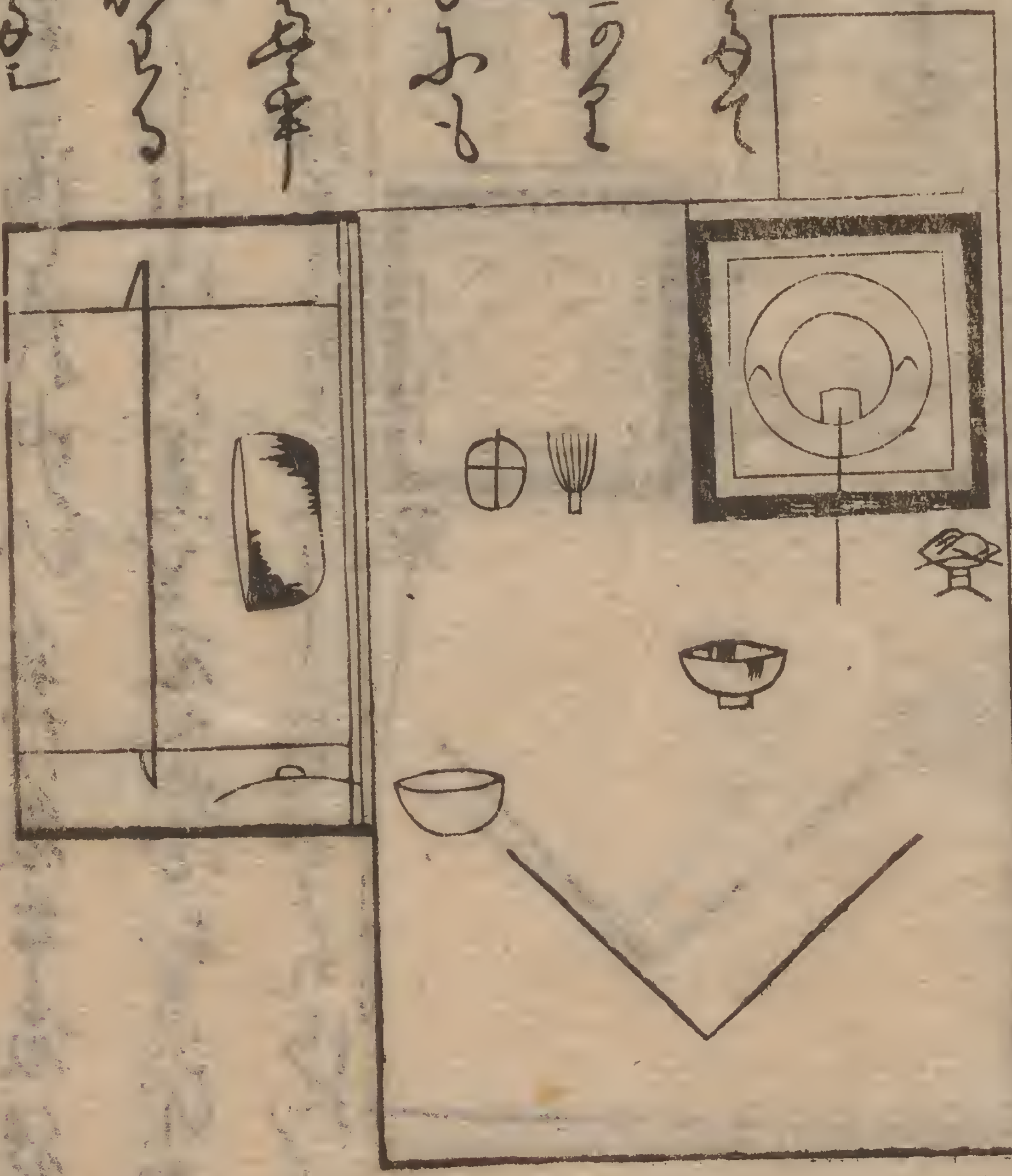
をして水こぼしにすへおし　蓋置を出し置おきぴやく
をけて茶碗を出し入れあり置帛にて出し巾ひ水
指のさる茶杓巾ひけ茶筌にて出しべし茶も常の棗
よりも入せし奥
有のぶるべし
柄杓を出し帛ぬぐひ筌
此蓋を置湯を汲入
茶碗を出しそぎし
しておろすも見茶巾
茶をあげてそのめ



一手前さく茶碗を上湯を掬巾ひ茶杓を出し置終りなどと
茶を入れあとへ出し水指の蓋を置之常おぴさく〳〵入れ
湯を入るは水からめ柄杓を八分めに置へ用しちうちうちはへりくくかき
あれおへおさを
併かくもなし
吹くめく點べし湯め
茶碗出すを湯をそぎを
して又湯入水ましくみ
入うけちる茶すぎくて
湯をこぼしの湯茶巾

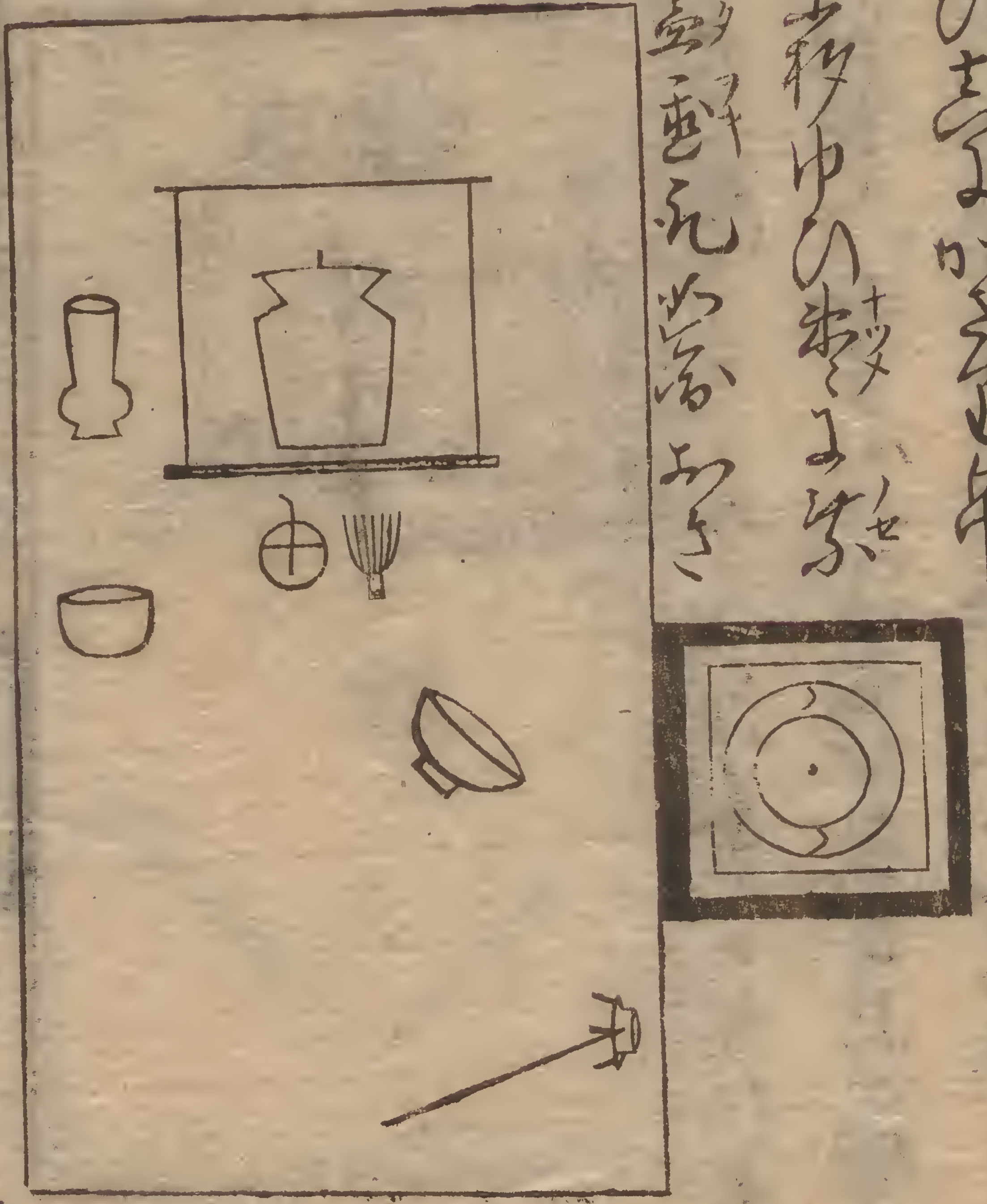


入下の相ことちやせん茶杓うけ出るなりとし茶碗をしめ
を出勢の御し茶入蓋をとる事ちて柄杓と膳より障子丸合
もの勝手へ給べし
一小座敷も茶碗も
かへおしおとし戸を立て
当事たり共も一の立
心次第之道具にふも
用る事丁寧大事手
なうにたへ手あつかへる
ものなりし口傳有之



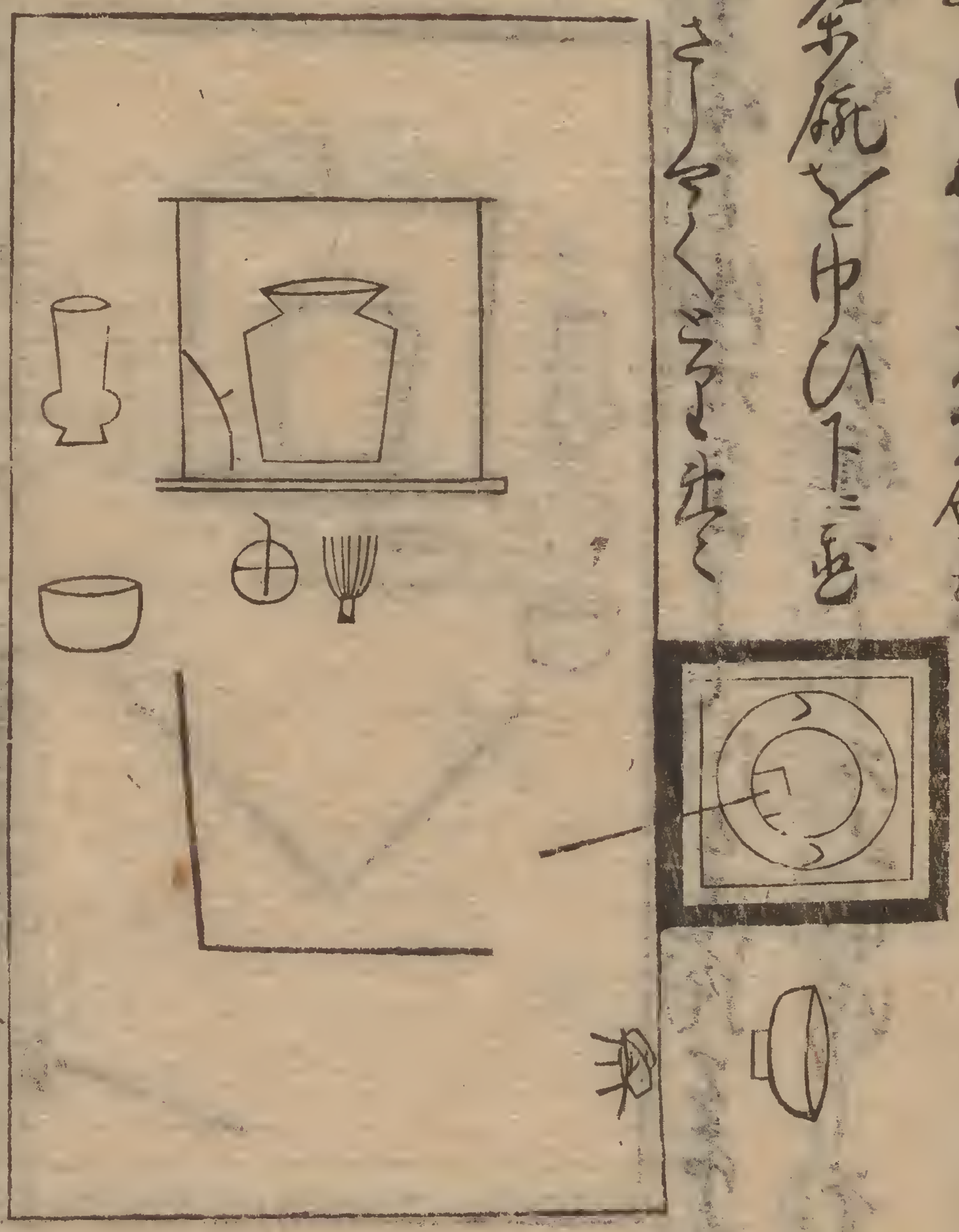
小休台子棚杉立にもあ
一古より先師え江府小堀遠州
公の御作にて拙数ちらせし時
しすがたとく飾
諸法の茶道流
おほくの間よ
つりすすはら一つつより
て稽古する之身膝に出し使用向ひ来く茶
碗と小膝におへ下ろし置炉いはつ手をとる水こぼしと折
通りに出して茶碗を夜営おやい帛ふくさ

して棗（ナツメ）を袋のひもにかざりて帛
さばき棗（ナツメ）をとり茶杓ひの棗（ナツメ）に荘（ノセ）
茶入を袋にいれ蓋（フタ）置（ツキ）を置茶



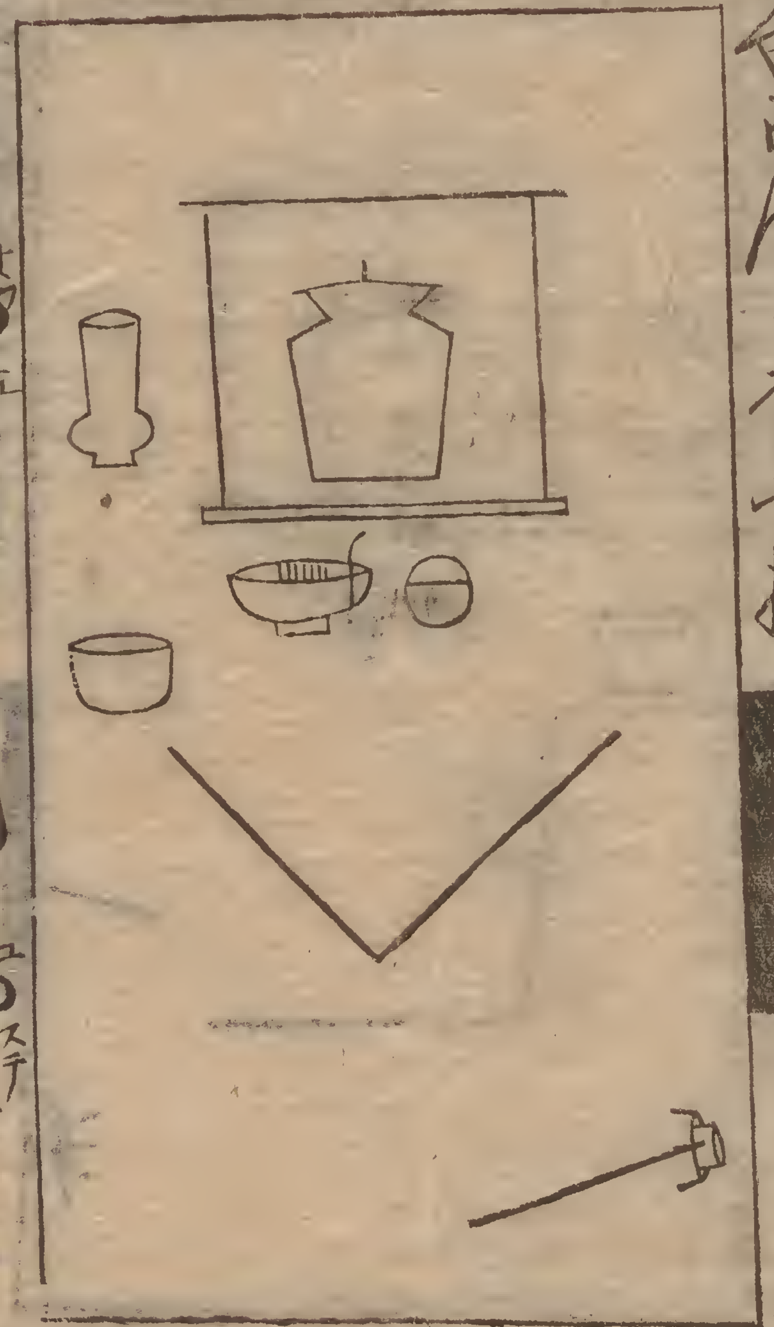
帛をさばき茶入の蓋を取之帛ハ下に置茶巾の蓋
にて置手ひきよせ二膝よせ茶杓をとり棗（ナツメ）の湯へ入茶
をさばき入たり茶筅（セン）湯に添（トマ）ひ三つまたしてなげ

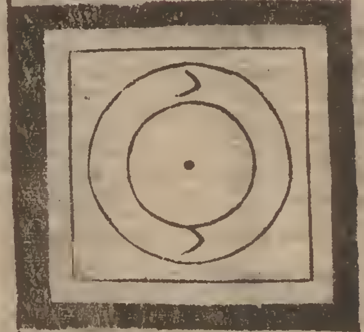
茶巾をたゝみあけにめぐる茶碗の
清（キヨメ）てむきて茶碗を巾ひ下に置
茶巾をたゝみ上（アゲ）てさしおくべき



次に蓋をとり茶を絹ぶくろに入てさして手にて取水指蓋
茶碗ひきよせ湯を入て絹ぶくろにて入湯を八分めにかへして水こぼし
よくよくもみ湯を八分めにへ入茶筅をふりてさくべし　抑

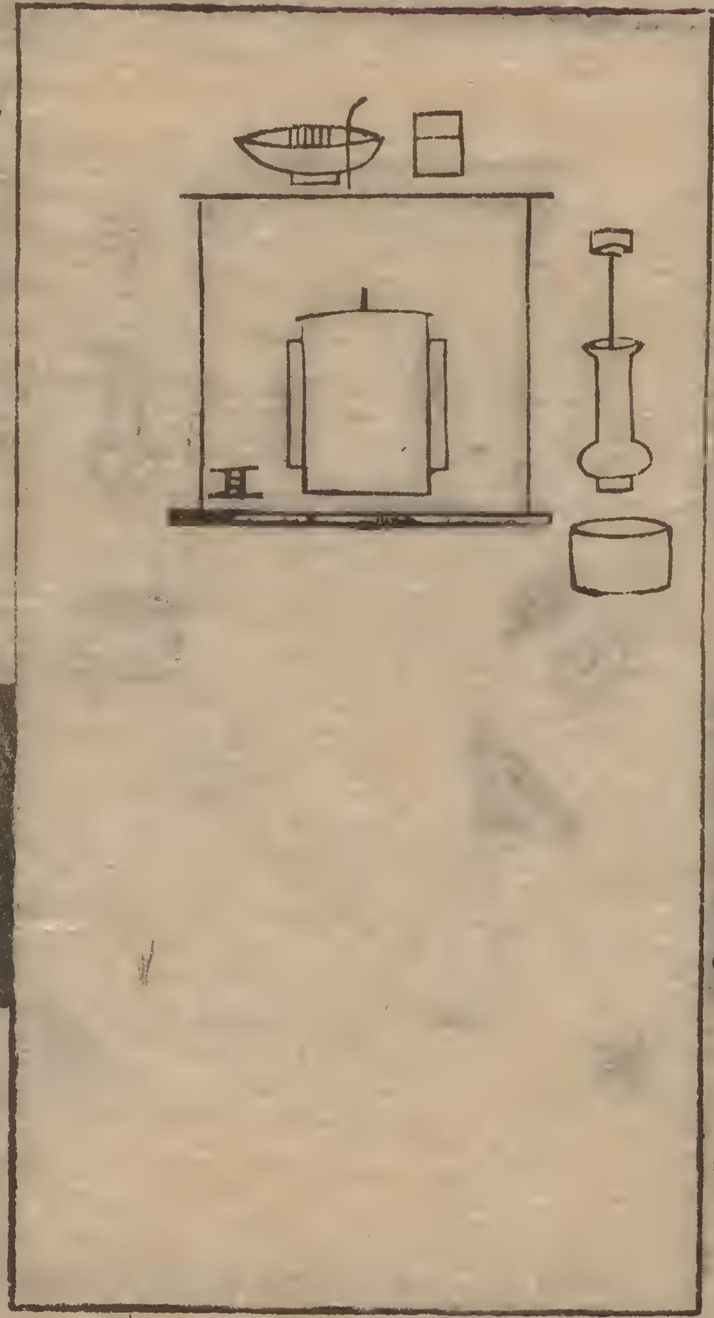
おへ出る何ぬくもしくとたくかを
一　湯(ヨウ)茶碗(カン)へ湯をそゝぎ捨(ステ)又湯を
入水よりん蓋(フタ)ちやらんと茶入へ指(サシ)





茶筅を洗ひ八つとめて湯湯(ユ)をうつしてりと湯捨(ステ)茶巾入茶碗
入茶杓うけ出し蓋し茶碗出し茶入水指し茶蓋(カニノフメ)之
ていひかくいらし水指さを出べし

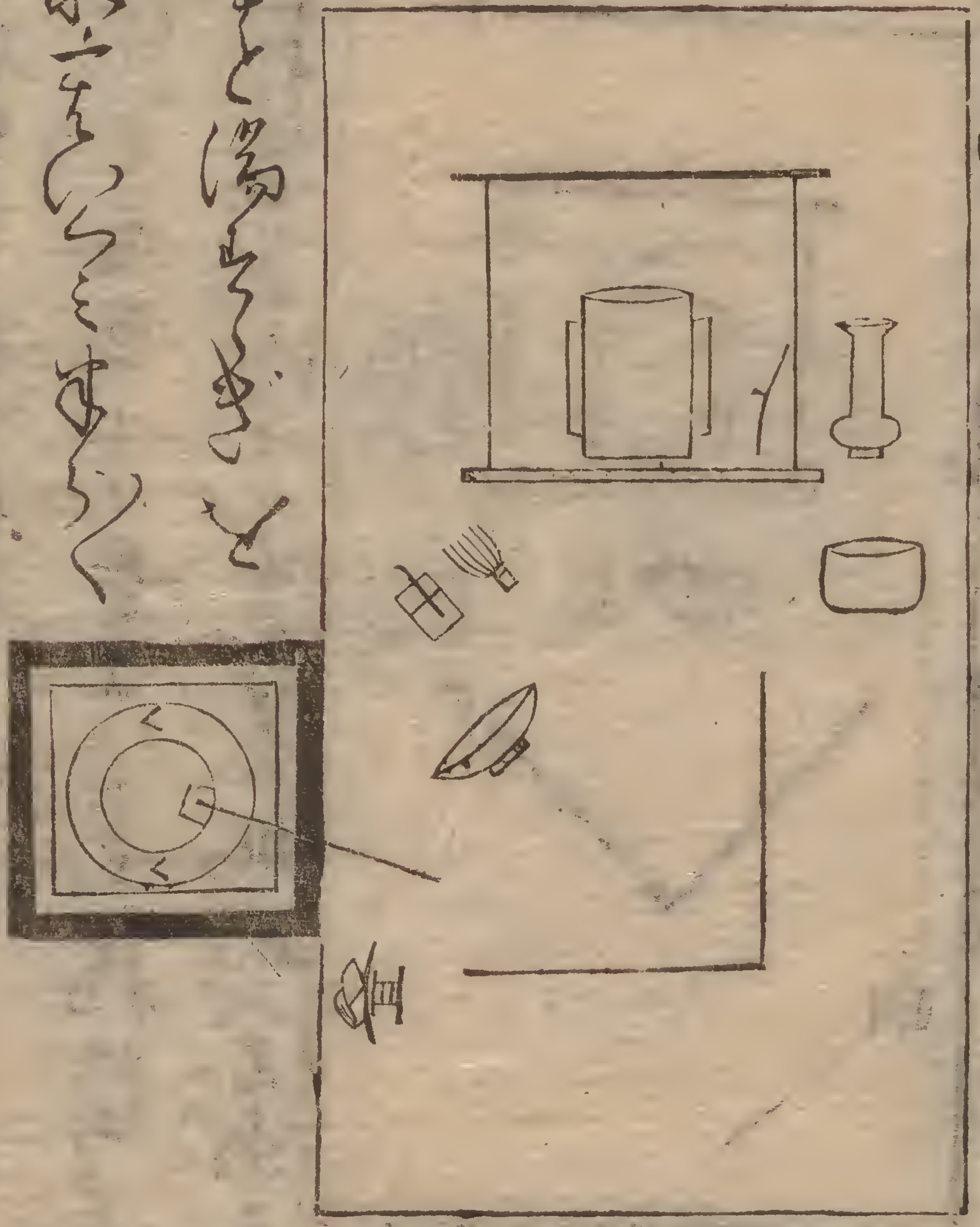
十七
達勝中小台子(ダイ)構杓立
一　帛腰をこゝ立小屏風よ向ひ中程茶碗を下し、いまも
水こぼし炉縁(フチ)ぎさらよ引出しいのとねとくいどぬまへ
して茶碗を置如常置す湯をあ
よわきさ帛あさぎ中ひ如常(スソウ)湯茶よ
文事(カザ)るゝ帛さゝそめ出し茶杓れ中ひ才湯よ茶(セ)茶筅



おくべし蓋置取出し帛紗ぬぐひ釜の蓋を取茶巾にけげ
ひしやく二服(フタ)にぬきれ柄杓しほ(ナラ)し湯をくみ茶碗にひしやくかけ茶筌を
取湯通(トヲシ)を仕て則茶巾をたゝみ茶碗にあらひ茶碗取湯捨

建水へ下に置き茶巾をたゝみ蓋
へ上(ル)茶杓取茶巾の上に置て茶
よきころに入あはしして茶筌を服し水さし蓋をとり

茶碗をひしやくれ湯を継ぎて茶碗に入れ一度ふりてかへ
しお茶ちやうど茶入茶巾を出し茶らくるとぬぐひてすまへ
し所ぬるゆくもたしぬべし

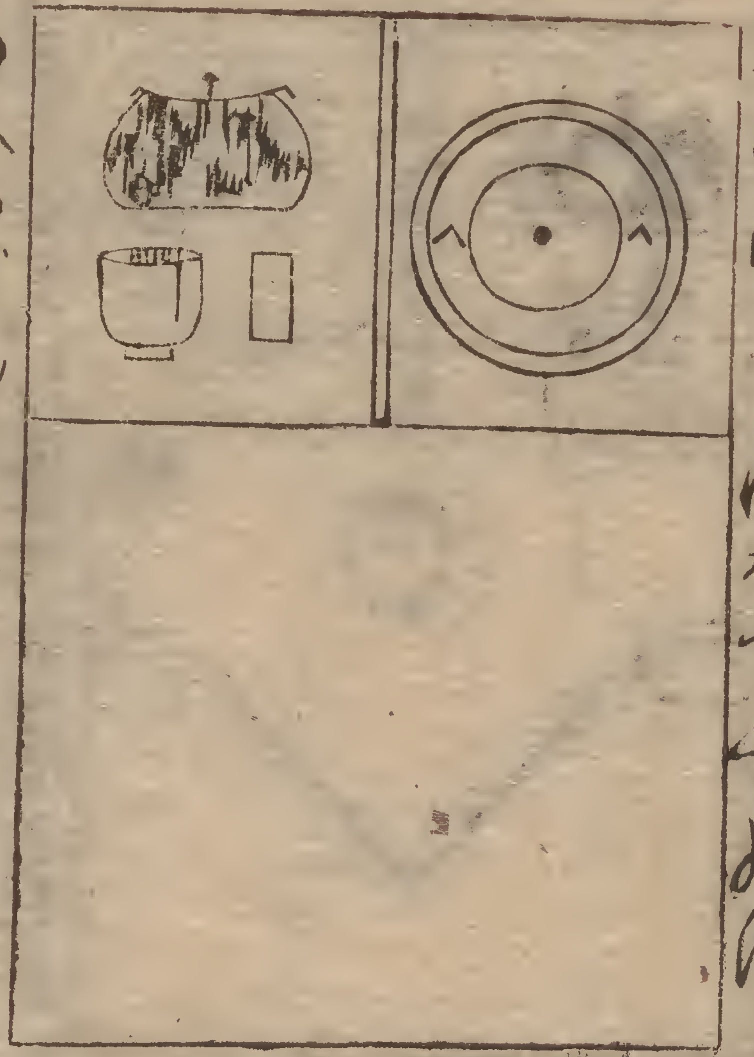


一治らんかへると湯をかきさと
して又湯を入れ水をひしやくまんく
茶碗へかけし茶巾をすゝぎ湯(ユ)捨(ステ)茶巾入茶碗入茶杓

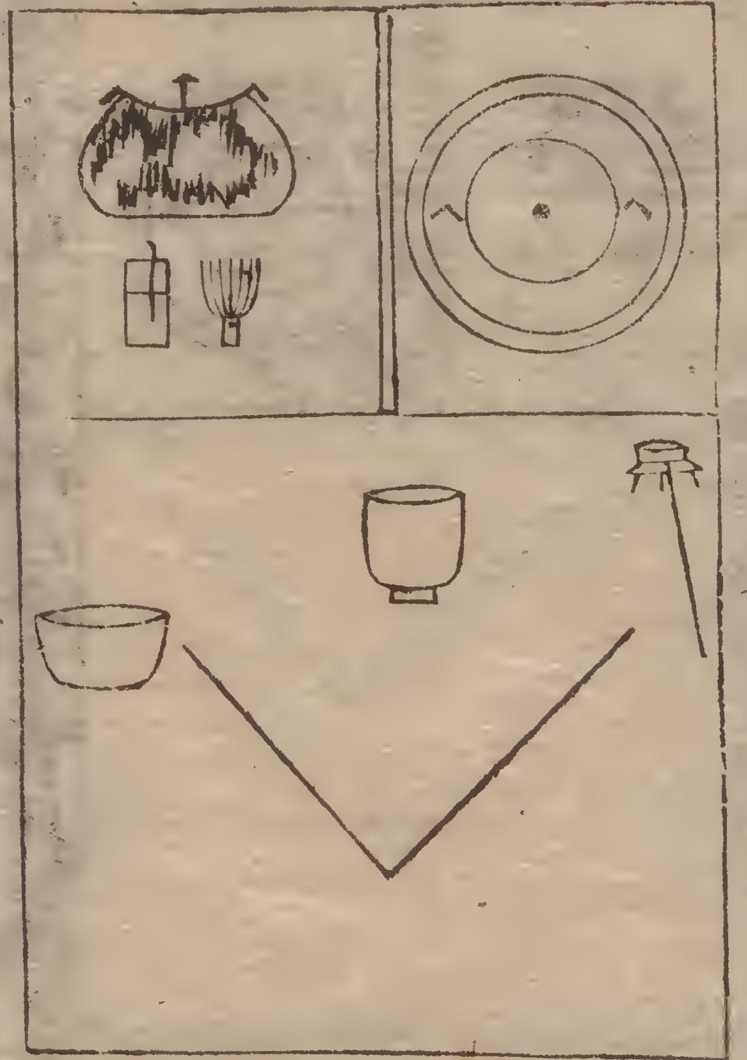
ひけ候ましき茶碗をき茶ひしやく取水二三まハし
茶巾蓋をしてひしやく取ましき其まゝ指ちかへとまた
左の手くひしやく取物指にをちし候茶碗都へと水こぼし
取るべし
一置合せ此炉中も風炉のことく笠文字
茶を建る事も口伝

向切たけの堂古

一此炉はいのちの堂古と縄ハ縁よちきき処よ多くかまへて
丸き銅の炉を入れてよ茶をのせる時ハ堂古の湯よをきく
持の用事を達するゆへふくんすをさしらねよかまく
けまき古きをある（金の）中指の釜の口しを極之水こぼしよ
ひしやく蓋置入指の茶おきひしやくと座のつきおきるべし

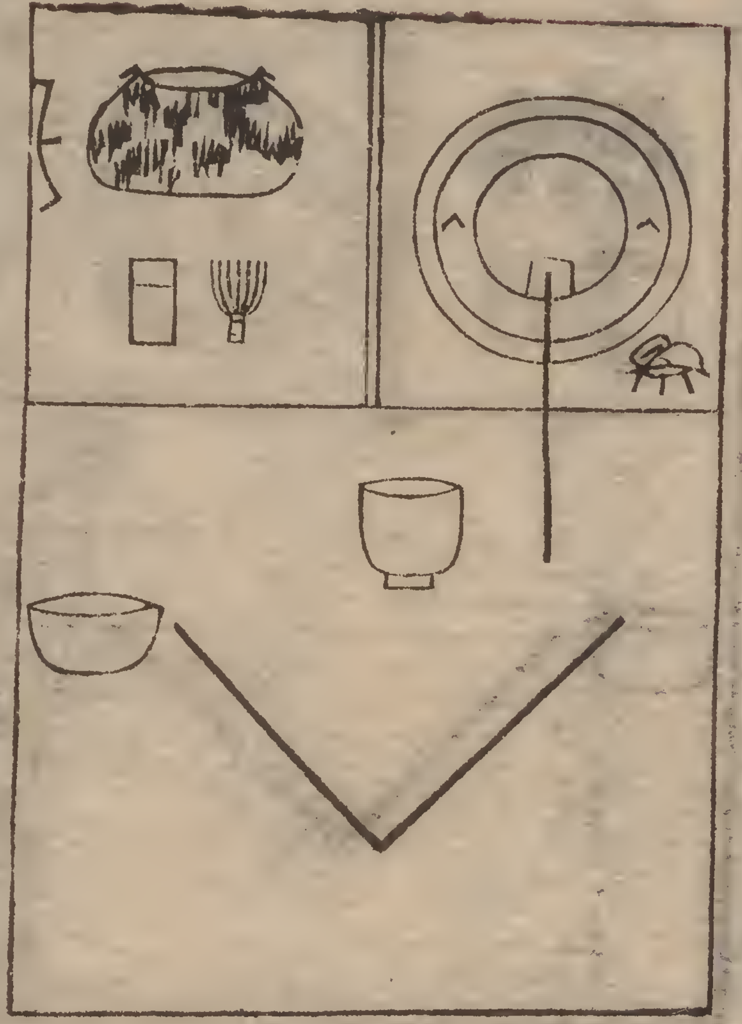


茶直し物仕かけ茶碗にかし常にかし柄杓をき中
茶巾ひ茶入を茶杓かけちやせんかくべしひつそれより蓋置
茶巾上湯にてひつくりかへりけ茶碗を入こぼしにつて
かこしを置く水指のおきし茶巾に茶筅を入茶碗
蓋と湯柄杓ひとりに置茶巾を入に蓋に置茶杓蓋中次
蓋とり蓋茶を仕かけと入出（もとノ）して水指の蓋を取露（つゆ）を切（きり）

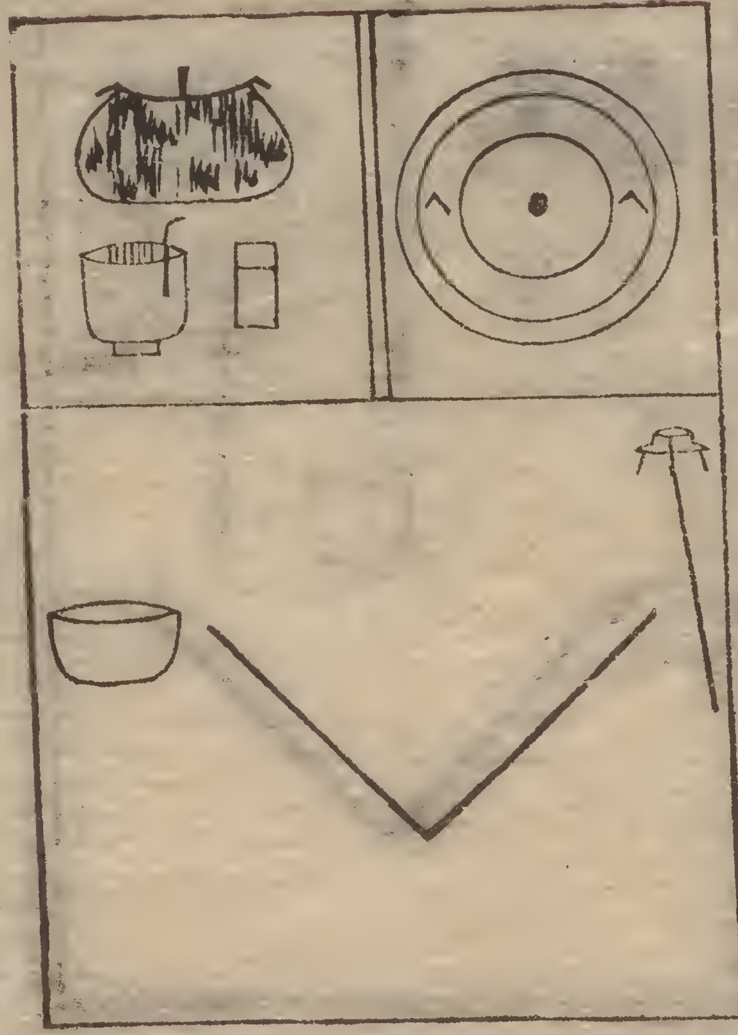


水指の蓋にて解（ほどき）ひとつ蓋湯を入水こぼしにかい名物の茶
残る茶碗にこぼし茶杓蓋はつくと始めて茶之仕様くも
くせたく申べし

一湯（すすぎ）茶碗飲（のみ）ると湯を入すすぎとして又湯を入水すべく
茶筅へ湯し茶筅をとうじをつして湯ハくと始めて上



湯於茶巾え下におきて茶筅を入茶杓かけ中次置し
茶碗あるべひとくれ其二三もいたし茶杓蓋とし てひとく
蓋置にかけ水指此蓋を右にをしして右の時はひとく
指へ五指と小指母指と人指高指とこつめて蓋置と
指定めくハ人々にかしを持方口伝



惣論(ソウロン)

一 炉(ロ)八つと謂(イツ)ハ東山殿(ヒガシヤマドノ)より定め有(アリ)来る所也半にあり遣(キヤリ)の
勝手(カツテ)炉(ロ)部炉台子(ダイス)に此一ツ半此ツ遣(キヤリ)は勝手有り
出(デ)炉角(カク)炉(ロ)炉合(アハセ)く四つ三重大此隠遣(キヤリ)の炉を部屋也
合(アハセ)く八つ之
一 [illegible]八畳まてよあ二三畳大よ二三より
一 畳半よりおお合(アハセテ)十二まお[illegible]口伝
一 自在(ジザイ)鎖(クサリ)炉(ロ)釣(ツリ)台子(ダイス)袋(フクロ)棚(タナ)[illegible]棚(タナ)小[illegible]台(ダイ)台子(ダイス)風炉
堂古(ドウコ)利休(リキウ)織部(オリベ)[illegible]大[illegible]此飾(カサリ)小[illegible]指(ヒニヤクサシ)
向切(ムカフキリ)[illegible]古(トウコ)長板(ナガイタ)[illegible]外(ホカ)之

一帛紗物の色くハ紫 しやう帛紗 紫と白との染分 茶やけ
に花色の色あり 惣浅葱をきらふ いろの染分にも
一色の物数寄心得ず小人ならバ持べき帛紗ハ一入合
帛を可とす
一茶入の蓋を取茶杓にかけるハかいの羽を解べくして取に在
中次以切薬器の茶杓ハかいのさきとうの先にかけ取べし
一茶杓を持にハ右の指を座へまつかけて持之
一中次の切を持にハ指をとろへ一文字に持之
一水指の蓋茶の下まつの面掃用ニしきハ横に生物の葉ハ
切をもなハ向く木草の葉ハ根をあけ切先へむけておくべし

茶の蓋つまミ亭主の長く右の方へ丸く横にをくべし
一中次継を入弓節と縄頭切を茶道とて焼物を薄茶
入と云
一茶子の凡鉄の鎖を一方とある事古来の唱之
一茶子の柄に帛をあてゝ内をぬぐふとするもあり まゝ
事行ハ口伝
一口広鉄銅の茶入象牙の平蓋の中と銀の金物
ある鉸具にある時ハ蓋の底横に口伝有之

一三ヶ条ハ此巻に茶湯手前を記すといへども前後一手おくに
とかく書違へ此草案あるべし事をいかなる事
かく書ハ布ヶ愚抄と思ひ書伝へ流伝ようも
要とあるべき事はみな記を其後門弟方にて右二道
此書よりさとて能一覧行へバ茶頭に記捨極所に能
心を付る人は古実として猥り也 任りに其所へ至り
てあるけれど事するなく宗匠の志之こうは世間を以
て記をこまほどきくしく者人にふかくも相談
宜ありし記ル時は心よく合点して万事
初心の為にあしらうべく記する者也

右書ハ一手おくをくどきが故にも合を入るハ仕代
みたりべし宗ちとよ気付故章なく書林仰
書しも世の事實よ一家物を編て沿ハ梓へ之るべし
と好まるおのおくよる書ハこうかへ茶人此おもりをよひ
続一茶之湯をへきかく之茶人と人よいるべし人は書物
を入まし一切ハ初心の人ハ茶之湯まで家文貴人
之る隠れ人の規矩をつとむる庵從小坊主などハいかにも
おきあるものハ心ゆく茶の湯ほどの事ハ不文人
まいり茶をさへたく茶ヘハとかく用よたる之ゝを
沢と三よ記し初心おとよまを於て敬すよ

書達ハ此一隠に古の人々かなまよ名錦の家人の
秘業たちを書き文學都の名數帯の圖のことを
し名術の書籍をあらはしたる是を道人のたるかなむけ
かまるの事

洛下隠人

遠藤元閑敬白